

# 仮面ライダー555vsGE ～神喰らう者と紅の閃 光～

ジュンチエ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので  
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を  
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

これは4号へと分岐しなかつた仮面ライダーファイズ＝乾 巧の：そして、鎧武GE  
2に繋がる物語。

物語共に命を終えようとした男は死に場所を求めてさまう中、奇妙な森へと迷いこん  
だ果てに彼は知らない未知の世界へ足を踏み込んだ。オルフェエノクが居ないかわりに  
荒ぶる神々『アラガミ』が人を全てを喰らう世界。そして、紅き閃光の戦士は再び立ち  
上がる：与えられた物語と人々のために。

…紅き光と共に、救世主再び……

※これは鎧武GE2の前日談にあたりますが、鎧武要素は冒頭のみなのでファイズとゴッドイーターのクロスもので単純に解釈してOKです。

目

次

第五話	第一話	第二話	第三話	第四話	第五話	第六話	第七話	第八話	第九話
後	前編	後編	前編	後編	後編	前編	II		
129	119	103	93	82	63	48	35	15	1

## 第零話

貴方たちは知つてゐるだらうか……？

葛葉絃汰＝仮面ライダー鎧武たちが荒ぶる神々の世界に来る前に……最初の来訪者がいたことを。

彼には夢が無かつた……だからこそ、誰かの夢を護ろうとした…………そして、戦い抜いた果てにその物語は終わりを告げるはずだつた。あとは朽ちるままの我が身がもつまで人間らしくいきようと考へた。

彼は満足だつた……例え、自分の『夢』が得られなかつたとしても…

「だが、それじやあ報われないよな？」

否。奇妙な植物が生い茂る森に立つ男は唱える。勝者には然るべき報酬を……戦い

抜いた勇者には喝采を。物語に關わらずも『観客』として見守つてきた彼の持論。『D J サガラ』は銀の果実を弄びながら語る……やはり、ハッピーエンドには良くも悪くも対価があるべきだと。

……されど、『勝者』は灰になりつつある身体を木に寄りかかっていながらも、憎々しいと叫ぶ。

「ふざけんな、俺はそんな報酬だがなんだか知らねえがいるかそんなもん！」

茶髪の髪に己から崩れおちる灰まみれ黒の服……。男はただ静かに最期を迎えるとしてただけなのに、気がついたらワケの解らん奴に勝者とか報酬とか更にワケの解らないことを言われてうんざりだつた。本来なら、今まで出会つた仲間：人々、それらを思い浮かべながら安らかにというのが理想だつたのに。

「クソ……神様つてのも、随分とヒデエもんだ……」

「なんだ、生きたいとは思わないのか？」

「…」

サガラは問うが男は答えない。いや、もうこの奇人が最期に見る生きた人間の顔というのが気にくわないが諦めることにして、反応するのをやめたのである。これに、サガラは：何かを察したのか彼の前に立つて膝を屈めた。

「ははーん、さてはお前……自分が生きてたところで、どうしようもないと考えてるな？自分は戦士であり救世主（メシア）……しかし、戦いが終わればそれはただのお荷物でしかない。ましてや、生きながらえたところで害悪だと？」

「…」

男は応えない。別に凶星だが、せめて走馬灯くらいゆっくりと浸かさせてくれ……と

⋮

「惜しいな、お前ほどの物語の役者が朽ちるのを選ぶとは……。まあ、確かにハツピーエンドのあとの緩慢かつ幸せな日常つてのもお前の役には相応しくもない。死をあえて選ぶのも美しい。ああ、どちらにしても惜しい……」

「悪いな、神様だが悪魔だが知らねえがいい加減、黙ってくれないか？」

……嘆くサガラにイライラする男。おかしな表現になるかもしれないが、快く死ねないだろ……と文句を言いたいところだが、ふと…サガラは何か思いついたように動きを止めた。

神……？

目を見開いて、蛇がスルリと巻きつくように立ち上がり、銀の果実を片手にフムフムと考へる。

一方で男は『何だよ…』と怪訝そうな顔で眉をひそめるが、すぐに奇人は笑顔を向け

てきた。

「良いことを思いついたぞ！お前に最も相応しい報酬は命じゃない、ましてや緩慢なハッピーエンドでも無い。『新しい物語』だ！これなら俺も楽しめるし、お前も価値を失わない。救世主はやはり、戦いの中に無くてはならないな！」

「は？」

いやいや、あんたなにいつてんだ……と口を開けようとしたら、男の口に果実は放りこまれた。すると、次の瞬間には背中の感触が無くなり：重力に引っ張られる感覚があつた。

嫌な予感がする……

「え？」

振り向くと、衛星写真からじゃないと見れないような風景が見えた：密集する建物の天井の数々つて、これまさか……

「これが、銀の果実の報酬だ！さあ、また観客である俺を楽しませてくれよ……乾 巧  
!!」

「ふざけんなあああアアアアア!!」

!!!!!!?!

予感的中。こうして、新たな物語の幕は人知れず上がろうとしていたのである。神を喰らう者たちと紅の救世主……

…はじまりへ続くはじまりへ…

「仮面ライダー555〈ファイズ〉×GOD EATER」

Φ

〔仮面ライダー555 ファイズ〕 VS GOD EATER

……Φ Φ Φ Φ Φ

この世界に神はいない…

男は瓦礫から這い出して思った。王とか神とかまともな奴がいた試しが無い…。今回もそうだと、『乾巧』は改めて身に染みる。

「ちつ……此処は何処だ？」

やれやれと、立ち上がつて煤と灰をポンポンツとはらうと……  
はらうと……?

「身体が…!？」

なんと、死に向かっているはずの肉体が完全に再生していた。調子も健康そのもの、崩れさる様子も無い。快調である。

理由としてはあの怪しい男に喰わされたこれまた怪しいあの果実。何者なのかは結局は解らず終いだつたがまことにそれよりもだ……

「…」

目の前は荒廃したビル街……くり貫かれた、いや『食いちぎられた』ような光景に巧みを呑む。時は夕暮れもあつてか、光の加減が美しく茜色で哀愁を感じさせる……

「世紀末ヒヤッハーでも出てきそうだな、おい。」

昔見た漫画の世界を思いだしながら、目を細める…。そういえば、最近はいちご味とかなんとか……まあ、良いや。

振り返つてみると、今度はとてつもなく巨体な壁……何かを囲うように果てしなく続いている。

「今度は進●の巨人かよ……」

こつちはテレビとかで話題になつてたはず……

おいおい、何なんだここ? テーマパークなんてレベルじゃないし、地獄にしても天国にしても奇妙過ぎる。まあ、明らかに生きている自分からすればこんな考えはふざけているのは理解している。

「はあ……木場、どうやら、お前のとこに逝くのはまだ先そうだ。」

確かなのは一足先に灰となり、天に召されたであろう戦友の所にはまだいけそうに無い。溜め息をつきつつも、生きているならまずは歩かねばと巧は壁へ向かつた。明らかに廃墟より真新しい雰囲気の建築物は人造物とみて間違いなし。瓦礫の山を降りて、とにかく壁に沿つて歩いてみることにした…。

「…これ、マジで夢とかじやないんだよな?」

向かつて、左……要は時計回りで歩いてみる。更に近づくと壁のスケールに圧倒されそうになる。それにしても、何故にこんな壁が造られたのか気になるのだが……まさか、本当に人を喰う巨人か世紀末ヒヤツハーがいるのだろうか？右と左の違う景色が巧の思考をウダウダと動かせるが、そういうしている内に壁のゲートらしきものが視覚に入ってきた…。ジープらしき車に人が乗つてるのも確認できる。思わず、彼は声をあげた…！

「おーい！」

すると、ジープの周りで何やら受付か手続きをしていた軍人らしき制服の男が近づいてくる。良かつた、普通の人間のようだ…。巧は安堵していたが、制服の男は訝しげに巧を眺める。

「貴様、外の人間か…？」

「外？」

「このアナグラに入っていない人間のことだ。しかし……」

「？」

男は首を傾げる。そんな彼にまた巧も首を傾げる……今の自分は普通の人間の姿なので怪しまれる要素は無いはず……

また、その後方では黒とも茶ともつかない金の装飾が入ったコートを着た男が煙草をふかして様子を眺めていた。

「……ねえ、リンドウ？ あれって外の人よね？ なんで、すぐに検査しないのかしら？」

隣には黒と緑の露出が高いエプロンのような服を着た女性。男をリンドウと呼び、巧について訊ねると彼は答えた……

「分からぬいか、サクヤ？ アイツ、外にいたにしては服装〈ナリ〉が綺麗過ぎる。俺達の関係者ならともかく……あれは妙だ。」

「……そう？」

リンドウ……彼は警戒していた。直感的に面倒事が起ころうとした。彼自身も、万が一のために動けるようにジープから降りて黒髪の合間から覗く瞳で見据える。

最中、巧の取り調べは続く……

「いや、そのあんたたちは何者なんだ……？ というより、ここは何処だ？」

「……ただ、やはり話が噛み合わない。言葉は通じるが、お互いの母国語を知らぬ国の者同士が無理に会話をしようとするようだ。その様子にジープに乗っていた一番の歳の若い黒を帯びる銀髪の青年がリンドウに話かける。

「リンドウさん……」

「……イッシン、気持ちは解る。だが、身内でもない役立たずを受け入れるほど余裕はない。」

優しい後輩だが、このご時世は全ての人間に優しい世界ではないのが現状。現実にシユン…………と肩を落とす青年に、リンドウはその優しさは失ってほしくないと願うのだが……

【……リンドウさん、聴こえますか!?】

「ん……？ どうした？」

突然、通信機より響く声に彼は耳を傾けた。オペレーターである少女の焦る声色は明らかに緊急事態と察せられるもの。

【B26地区エリアの装甲壁が突破されました！任務後で申し訳ありませんが速やかに防衛班と共に侵入したアラガミの討伐にあたつて下さい。】

「了解。サクヤ、新入り…………楽しい、楽しい、残業の時間だ。」

すると、ジープは方向を変えて壁に沿つて去っていく。無論、巧も話の内容を含め様子を確認しており、銃を持つ話し相手が敬礼して見送る瞬間に『変身』し、死角を縫つてその後を追つた…。

阿鼻叫喚……そこは『殺戮』の場…

1体の巨大な異形が並ぶあばら屋をなぎ倒し、悲鳴をあげて逃げまどう人々を蹂躪していく……

『ヴァジュラ』

黒虎のような外見に角・赤いマントと何よりも巨体が見る者全てを畏怖に陥れる。慢性的に飢えた獣はあちらこちらに駆け回る人間（エサ）を喰らおうと舐めるように視

線を動かす。

「あう！」

その内、赤毛に近い茶髪の少女が躊躇して転んだ。ちょうどいい、コイツが今回のランチだ……

『グルルル……』

「ひいつ!?」

獲物は恐怖にうちひしがれて動きを止めた。獣は絶えない飢えを満たすため、大口を開け……

——ズギュン!!

『……グウ!?』

その時、頬をかすめた弾丸に動きを止めた。痛い…………という感覚がヴァジユラにあるかは不明だが、振り向いた瞬間にチエンソーの刃が眉間を斬り裂く。

「おおら！」

『ギア!?』

それは先の男、リンドウが持つ身の丈ほどあろう剣。これはヴァジユラに手痛いダメージを与え、身を翻つて距離をとらせた。

「逃げろ……！」

「……は、はい！」

一方、少女はリンドウに促されてもつれる足で逃げ出した。しかし、折角の獲物を逃がすまいとヴァジユラはリンドウから離れて少女を追う。

「行かせるかよ！」

咄嗟に剣を振るい、立ち塞がろうとするリンドウ。その瞬間、獣は地を蹴つて跳躍した……。しまつたと思った時にはもう遅い。

……ヴァジユラは非力な少女に飛びかかり：

『オラッ！』

『!?』

あと一息……の所でまたしても邪魔が。空中で脇腹に体当たりを喰らった獣はバランスを崩してゴロゴロと転がった。忌々しい……と睨めばそこには見慣れぬ影がひとつ。

『……』

白く……刺々しく……

彫像のようで、シエルエットはまさに人狼……

『…たく、なんだつてんだこの世界は。』

本来、この世界に現れるべきではない存在。ウルフオルフエノクが少女の危機を救つたのであつた。

To be continued:

## 第零話 II

『…』

ウルフオルフェノク＝巧はヴァジユラと対峙しながら、舌打ちをした。咄嗟に少女を助けるために飛び込んでみたものの、この先はどうしたものか。『逃げろ！』とまずは少女を逃がし：異形と化した肉体と五感で相手へ自らとは異なる未知の異形を見据える…。

体当たりのダメージはさして無いようで、外見のように知能や様子も獣に近いよう。パツと見たところ、自分がいた世界の虎に近いが巨体は遙かにそれを上回る。ただ、同じなのは人間だろうと構わず襲う：血肉を喰らう存在。肉食動物の部類であるはず…。

この狩人たる異形は異質な乱入者である自分を警戒していおり、何者かを測りかねていた。

『…グルア!!』

「！」

瞬間、飛びかかつて降り下ろされた強靭な腕をバックステップでかわす。その流れで

飛びかかってきたのも、横に飛び紙一重の回避。その時にガラ空きになつた背中を蹴りつけてみたが、軽く唸るくらいでろくにダメージが入らない。

硬い……人が喰らえばただでは済まない怪人〈オルフェノク〉の攻撃を容易く耐え抜くヴァジユラ。蟻がいくら鳥に立ち向かつたとて喰われるのみのように、今まで戦つてきた経験からこのままではジリ貧間違いなし……

（せめて、ファイズギアさえあれば……）

巧の持つ最大の武器さえあれば、まだ善戦できたろう。生憎、ベルトは愛車と一緒に前の世界に置いてきてしまつた……無いものねだりは虚しいだけ……なのだが、彼は知らない。

この世界には、すでに強者に抗う『力』があるのだと……

「どりやあ！」

『！』

ヴァジユラの死角……不意をつくように迫つた人影は再びチエンソーのような剣で襲いかかる。今度こそ、えげつない回転刃は猛虎の左目を抉り：悲鳴を上げさせた。そこに、またも何処からかスナイプされて傷口に弾丸が直撃。激痛にこの恐るべき巨体は地に伏した。

「おい！そこの白いお前!!こっちの味方なのか…!?」

剣からサツと振つて血をはらい、彼…雨宮リンクドウは問う。さて、こっちとはどういう意味なのか……。

今はごちやごちやと考へてゐる時ではない。  
ならば……

答は…：

そう、乾 巧はいつだつて……

「…俺は仮面ライダーへ人間の味方』だ！」

悪と対峙し、理不尽に抗い、誰かの夢を守る。

ベルトが無かるうと、別の世界であろうと、たつた独りであろうとも……

……仮面ライダーである在り方は変わらない。

『うおおつ！』

ウルフオルフェノクは飛び上がり、起き上がりかけたヴァジユラの頭を殴る。傷口が開いていた箇所であつたため、先の時とは違い衝撃によりダメージが入り：白い異形は帰り血を浴びる。加え、更に容赦なく傷口に蹴りを全力で入れると彼は半分、白い表皮を真っ赤に染めていた。

：その様子に、リンドウは首を捻る。本当に彼は味方なのであろうか：いや、事情はあとで良い。剣を構えて彼は仲間に叫ぶ！

「サクヤ、バツクアップを頼む！ 白いのはまだ射つな！！」

「ちよつと、リンドウ正気なの!?あれもアラガミかもしけないのよ！」

「：今は共闘！ 新人を下がらせておけ！」

通信から驚愕の声が響くが、勢いで反論を黙らせて彼は走る！ ウルフオルフェノクがつくつた決定的な隙を逃さず、半壊した猛虎の頭を踏んでジャンプすると身体を捻つて回転をかけた一撃。背中と尾を斬り裂いて、着地すると反転して巨体を支える後ろ脚を刻み、ヒラリとウルフオルフェノクの前に着地した。

「……白いの、んじやあんたをこの場は信じて良いな？」

『…………ああ!!』

さあ、ここからは本番だ。立ち上がり、疾走しはじめて逃走しようとしたヴァージュラを遙かに上回るスピードで回りこみ、傷つく脚を腕にものをいわせて攻撃。バランスを崩して足がもつれたところをリンドウが再び狙い、地から踏み出す！

「くらえつ！」

『ガアツ!?』

狙つたのは先に切断した尾の傷口。脆くなつた場所は最もダメージが入りやすい。このままリンドウは背中にマウントすると、そこに剣を突き立てる！

「サクヤ！コイツの頭をぶち抜いてやれ！」

【待つて！そんなに暴れてちや、狙いがつかないわ！】

狙撃手にトドメを依頼するが、リンドウに貫かれたことにより激痛から暴れまわるヴァジユラ。そこへ、一気にウルフオルフェノクが距離をつめて拳を握りしめ……

「……おとなしく、しゃがれえ！」

ドゴオオ!!!!

顎から、殴り抜き……盛大にアツパー。瞬間、狙撃手の標準が猛虎の頭蓋をとらえる

【今ツ!】

その時、引き金は引かれた。流れ星のような閃光が、ヴァジュラの頭を貫き……鮮血が舞つて……

傷ついた身体が近くのあばら家を押し潰す形で寄りかかった。

『やつたか…』

ウルフオルフェノクは勝利を窺う。されど……

「まだだ……」

『グルルル……』

猛虎はまだ立ち上がる。自らはまだ負けていないと……敗北という屈辱は受け入れないと……

やがて、マントを逆立て……その身体は稻妻を帯びる。

ヴァジュラはただの虎ではない。容姿がいくら似ていても、コイツの一番の特徴は『雷』……故に、今、追い詰められた雷虎は自分の最大の技を放とうとしていた。

「来るぞ、かわせ！」

「ああ……」

リンドウが叫ぶ！すぐに逃げようとしたウルフォルフェノクだが、足を止める。ヴァジュラの足許……よく見れば倒れて腰を抜かしている人影。

「！」

リンドウから死角になる位置に見覚えのある顔……先程の少女がいるではないか!? 逃げ遅れたのか……いや、どうこう考えるより先に雷虎に向け疾走する脚。滑りこむ身体。リンドウの制止すら届く前に振り切り、幼い身体を掴むと彼方へと放る。これで、稻妻は届かないが……

……当の本人は逃れる時間は無い。

『グルアアアア!!!!!!』

『バチバチチチ!!!!!!』つと同時にプラズマが弾けてウルフォルフェノクを襲う！

背後からもろに電撃を受けた彼は『かつ!?!』と気の抜けたような声を出し……黒焦げとなり灰を撒き散らしながら地面に転がった…。

「おい!? やいつ！ クソッたれが！」

気を失う直前、耳に響いたのは毒づくりンドウの声。後はヴァジユラの断末魔に……自分に駆け寄る少年のような人影を見たような気がした。

……その後、彼が目を覚ますのはしばし先である。

Φ Φ Φ Φ Φ

「さくて、だいぶ面白いことになつてきたな。」

サガラは今までの様子をとあるカフェの一室からタブレット端末から覗いていた。手元には大きな錠前式の果実が描かれたアイテムかキラリと鈍く光る…。こちらが本

来の彼の本業のものだが、ある程度の並行世界で自由が効く身になるとやはり、また別の楽しみとして：『観客』として手を貸して物語を見届けるのはやめられない。何故かつて…？

面白いからに決まっている…：

いつから、こんなことをはじめたのか当の昔に忘れた……いや、思い出すつもりが無いだけだが楽しみが多いに越したことはない。

「さて、このあとはどうする？乾巧…荒ぶる神々の世界といえど、人間はそう甘くは無いぞ。」

Φ Φ Φ Φ Φ…：

「！」

見知らぬ天井は容赦なしに覚醒したばかりの巧の網膜を照らした。眩しい……と顔を背けて手をかざそうとしたが、腕……と動かない。おまけに、全身が動かない……。

見れば、頑丈そうなベッドに皮や鎖の拘束具が自分を縛り……よくわからない病院とかの患者の脈拍をはかる機械らしきものが並べられている。されど、ここは病室ではなく円柱状の広いホールのような鉄の部屋。目前の壁には狼の紋章にこの場を見下せる位置にある窓ガラス。人影も奥に見える……。

【…自覚めたようだね、狼男くん。】

その人物だろうか……スピーカー越しの男の声。若くはないが力強くハリのある声……声色からそれは指導者に準ずる者だろうか？とにかく、巧は寝ている間に手厚い歓迎をしてくれたであろう顔が見えない犯人にキツイ視線を向ける。

【そんなに怖い顔をしてくれないでくれたまえ。別に我々は君に危害を加えるつもりはない。】

「おいおい、こんだけ人を厳重に拘束しておいて良く言うぜ。ふざけるのも大概にしてとつとと、外せ！」

【…それは君の対応次第だ……と言つておこう。】  
「ちつ……」

あ、コイツは俺の嫌いなタイプかもしれないと思つた巧。正直、イラツときたので舌打ちすると徐々に四肢に力を込めていく……

「一応言つておくが……俺は気が短いからな。交渉をするなら対等（フェア）からつてのが常識だろ？ ブチキレる前に……拘束具を外せ。3つ数えるからな……」

〔何？〕

〔いーーーつち……〕

顔が見えない男は困惑した……共に、鼻で笑つた。この男はいつたい何をしているのだ？ なんともシユールなカウントダウンに臆せず、男はマイクに口を近づける。

〔言つておくが、その拘束具は並みの神機使いでも外せ……〕

〔にいーーー……〕

〔……ない……。つて訊いているのかね？〕

勿論、巧は聞いてすらいない。何故なら……

〔3……時間切れだ……〕

「……覚悟はいいな？」

〔!〕

このくらいの拘束ならウルフオルフェノクになつてしまえば簡単に破れるのだから。不意を突き、再び狼となつた巧は弾けとぶ拘束具を払い……窓ガラスを睨む。首と手をボキボキと鳴らして不機嫌全開で口を開く。

「責任者出せ、この野郎。」

その時、背後の扉が開き……勢いよく細く巨大な銃身が向けられた。反射的に身を反らして撃たれたレーザーをかわすと鋼の壁を蹴つて一気に距離を詰めにかかる。あと少しで爪を突き立てそうになつたが、ギリギリで止め狙撃手の顔を見る。

この時、彼は気がついた……

「あんた……あの時の……」

おかげで頭にスタイル抜群の妙に露出が多い服。確かにジープにリンドウの隣にいた女性だ……。男だつたら、気にも留めないだろうが割りと美人は忘れられないのはオルフェノクであつても男の性か……

とはいへ、警戒されているのですぐにバックステップで距離をとられた。戦闘は避けられないようだ……。

「おーい、ストップ！ストップ！」

…と思われた時、ウルフオルフェノクの前にある男が現れた。それを名は知らずとも共に一時でも共闘したなら忘れない…雨宮リンドウという男だとすぐ判別したウルフオルフェノク。彼はポンポンと異形の肩を叩きながら頭をボリボリと書いて説明をはじめる。

「いやあ…わりい、わりい。どうもウチの御偉いさんは部下の話を聴かない節があつてねえ。全く困ったもんで。支部長、コイツが起きる時は俺も呼んで下さいって言つたじゃないですか！それと、敵じゃないと言つたでしょ！！」

「リンドウ大尉、君が出る幕ではない。ここは我々が片付けるべき問題だ。】

「リンドウ、どいて！コイツは危険よ！！」

ふむ、大体の流れが解ってきたウルフオルフェノク…。多分、先のヴァジュラ戦と寝ている間とかに検査とかされて怪人ということもバレているはず…ならばと拘束してある程度、拘束にも始末にも少しでも安全性に長けるほうをとつたに過ぎない。捕らえた野生の狼をわざわざ首輪をつけず、病室のベッドに寝せると同じようなことするわけあるまい。

「サクヤも上官命令……打ち方まで。俺の指示に従え。」

「でもっ！」

「俺を信じろ。」

されど、自分を信じてくれるリンドウという存在は大きい。この流れならわざわざ事を荒立てる必要は無いかも知れない。」

「いや、改めてすまない。俺はフエンリル第一部隊所属・雨宮リンドウだ。隊長をやつて。こつちは『橘サクヤ』……んで、なんかさつきから偉そうな声をだしてこの場にいなのが俺の上司。失礼を重ねすぎて申し訳ないが、あなたの名前は……」

『……乾巧だ。』

Φ Φ Φ Φ Φ

それから、暫くして巧は人間の姿になると……リンドウに付き添われ彼の上官の部屋へ向かう。窓の無い廊下……並ぶゲート式のドア。白い清潔な通路を進み、一番突き当

たりにあるソレへと進む。

「んじや、俺の上司どこの対面。思うところはあるだろうけど、出来るだけ抑えてくれな……悪い人間じやないんだ。」

「ああ……一応、心掛けとく。」

リンドウにたしなめられながら、巧はまだ燃る怒りを呑み込み開け放たれる先を見た。無機質にプシュツと音が鳴り、廊下と部屋の境であるゲートがスライドするとまず目についたのは立派なオフィスデスク……壁の絵画、皿……そして、先の部屋でも見た壁に描かれた狼の紋章。それらを眺めるように巧たちに背を向けて立つ白いコートの男が立っている……。背丈は高く、金髪・マフラーを首にして毅然に立つ姿はすぐに直感させる。

この男があの声の主であると……

「……先程は随分と失礼をした。私がこここの責任者、フエンリル極東支部支部長『ヨハネス・フォン・シックザール』だ。そこのリンドウくん曰く、部下の話を聴かない節のある上司でね……」

このしやべり方……雰囲気、支部長というだけに怪人を目の前にしても膽さない物腰……許しを乞うのではなく、あくまで会話をかけてくる様子は彼の上に立つものとして器量を感じさせる。カリスマ……とでも呼ぶべきか、巧はそれを感じると吐き出そ

うと思つた苛立ちを喉で止めた。

「だが、解つてほしい。人間でもアラガミでもない存在を野放し：ましてや、ただで病室に放り込むわけにはいかなくてね。そこは、上司として組織と部下を守る立場として相応の態度をとつたつもりだ。どうしても、怒りがおさまらないというのなら私の命ひとつで許してくれないか……？」

「…」

さて、どうしようか？別に巧だつて人殺しをしたいわけではないし、ここで支部長を八つ裂きにすればリンドウを含めてこここの施設にいる人間たちが皆、敵にまわるだろう。まず、落ち着いて考えて必要な情報を引き出そうと思いつく。

「別に、あんたを殺すつもりは無い：代わりに幾つか質問する。アンタらはさつきの怪物のことを知つているのか？」

…1つ目、明らかにオルフェノクではない異形。巧にとつてはこれが最初の問題だつた…。すると、支部長やリンドウが少し驚いた顔をする。まるで、誰もが知る常識のことを真顔で訊かれたよう…

「…アラガミのことかね？」

「アラガミ？」

聞き慣れぬ単語……最初は神様かなんかと思ったが、あの雷虎の姿を思い出すにあん

な神がいてなるものかと予想を捨てる。

「奴等の……その名前なのかな？」

「…」

巧は続けて問うが、支部長やリンドウが明らかに戸惑う反応を見せる。とにかく、オルフェノクでは無い……この世界の固有の存在で並行世界から来た自分では常識の範囲内にあるあの怪物の存在もわからないということ。彼等は知る由も無いのだが……

「度重ねて失礼になるが……頭でも打つたのかね？」

「……高い所から落とされた。」

……嘘は言っていない。

「そうか……記憶がショックで混濁しているのだろう。ふむ……あれは『アラガミ』……君が戦つたあの種はヴァジユラと呼ばれているアラガミの中で大型に部類されるものだ。」

「……その言い方、まだ他にもいるのか？」

「ああ……多種多様のアラガミが、今は世界の大半を闊歩している。」

成る程、だからこそ壁の外は荒れ果て、人の気配が無かつたのか……。それにしても、随分と厄介な世界に飛ばされたものである。あのサガラという男……次会う時が来たら殴る理由がまた一つ増えた。

「じゃあ、アンタらはそのアラガミと戦つてるつてわけだな。」

「無論だ。我々フエンリルはアラガミの脅威から人々を護るために存在している。そこ のリンドウくんもまたその一員だ……」

「……さて。今度は私が問おう。」

「ここで、立場が逆転する。巧が質問する側から質問される側にまわる……。支部長は強く巧を見据え、彼に問うた。

「君は我々の味方かね？ それとも、アラガミと同じ人類〈ヒト〉を仇なすものか……？」

「…」

「我々：組織？ いや、そんな小さい括りでは無い。人類の全ての敵なのか、味方なのか という意味。敵なら容赦なく目の前の怪人とこの男は戦うだろう……決意の色は眼差 しから見るに充分だった。

リンドウも緊張の汗をかく中……巧もまた目をそらすことなく対峙する。

「つまり、アンタらは人間の味方……護る側つてこと良いんだよな？」

「…そう解釈してくれて構わない。」

なら、答えは決まっている……

「良いだろう、そういうことなら俺はアンタたちの味方だ。人間を護るのが俺の仕事＜  
バイト＞だからな。」

……今、ここに彼は告げた。

……新たな物語はこの荒ぶる神々の星であると…

ファイズギアも、バイクも無いゼロからのスタート……

これは、神喰らう者と救世主のプロローグである。

T  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d  
...

# 第一話

「……」

「まあ、そんなに邪険にしないでくれたまえ。」

巧は一悶着のあと、リンドウと新などある人物と共に先の拘束されていた部屋に來ていた。本来なら訓練施設に当たるとかなんとか言つていたが：まずこの白髪の狐のような眼鏡男が気になつて仕方ない。巧を前にして微笑を崩さず、ローブともつかぬ茶色の服を着た研究者の雰囲気を持つこの男……

「そんなに、険しい顔なさんな。この人はペイラー・サカキ……うちのラボ・ラトリで研究・開発を担う科学者ながらでトップ：んで、この支部だとN.O. 2つてところだな。  
実質上……」

「おやおや、リンドウくん：私はあくまでも一介の研究者だよ。まあ、支部長とは長い付き合いなのは事実だけど初対面の方に誤解を生むような言い回しは控えて貰いたいね？」

「おーお、何処の口が言うんだか……」

正直、組織の上で研究者なんていう肩書きが揃えば嫌な予感しかしない。というより、まともな人間がいる気がしない……。この『ペイラー・サカキ』という男が持つ独特の雰囲気は多分、先の支部長とは違う意味合いで友好ではない関係になりそうだ。

そんなペイラーが指した場所には巧が拘束されていたベツドがあつた場所……そこに、上下に空いたバイオリンケースのような赤い台座があり、身の丈ほどある『槍』らしい武器がある。

「さて、乾君。そういうえば、まだちゃんと話をしていかつたね？これから正式な君の処遇についてだが……我々と同じエンリルの職員：その中でもアラガミと直接、戦闘を行う神機使い／ゴッドイーター／として働いてもらおう。しかし、いくら君が言う『オルフェエノク』と呼ばれる力が特殊でもアラガミに対しては決定打を与える力にはなり得ない。」

それは、巧自身も承知している。ヴァジユラには自分の攻撃はあまり効いてはいなかつたのは実感していた……。『そこでだ……』とペイラーは続ける。

「君はゴッドイーターになる気はないかい？人々のためにアラガミと戦うなら、この神機の力は必要不可欠だ。勿論、選ぶ権利は君にある。」

今、ファイズギアは無い……そして、オルフェエノクの力も通じない。なら、あの神の名を与えられた異形を相手にどう立ち向かう？

喰らうための『牙』は目の前にある。掴む権利も覚悟も自分にはある。

「どうすれば良い?」

「…即答かい? 一応、言つておくけど後戻りは出来ないよ?」

「後戻り? 必要ない…ここにくるまで退ける道なんて無かつた。手が届くなら戦つて誰かを救うために必死だつた…。」

上等だ……

無言でおさめられた槍の前に立つのが彼の返答。ならばと、ペイラーは告げる。

「…言うまでも無し、か。なら、台座の窪みの部分に腕を置く形で神機を握りたまえ。後は成り行きに任せれば良い。」

言う通り、巧は槍を握る。重い…………やはり、重い。リンドウは身の丈ほどあろう小枝のようにはじいていたが、質量に見合うだけの重量をこの武器は持つ。オルフェノク化するならもしくはといった具合だが、生憎なところ巧の能力はパワータイプではないためそうであつても難しいかもしれないが……

……なら、普通の人間のリンドウが何故に神機と呼ばれる神をほふることができる武器が使えるのか?

この時、窪みの部分がリンドウのつけていた腕輪を半分にしたようなものだと気がつ

けば良かつたと彼は後悔することになる。

「ああ、良い忘れていた……ちょっと痛いだけとさつきは言つたけど……それ、死ぬほど痛いよ！」

…は？

…ガタンッ！とまるで、ギロチンのように無慈悲に台座の上部が落ちてきて巧の腕を挟んだ。フリーズした彼の不意を完璧について、『ナニカ』が焼けつくような痛みで血肉を搔き分け植物が根をはるように自分の中に侵入してくる！

「……ううう、があ、ガアアアアア?!？」

激痛に悶える巧は荒ぶるままに、意図せず自らをウルフオルフェノクの姿となつて腕を引き抜こうとするが台座はピクリともしない。そんな様子をリンドウとペイラーは息を呑みながら見守っている…：

『……がつ、アア!?』

もがく男は台座を殴りつけ、拳サイズ凹むまでの衝撃を与えた。それでも、気は紛れず腕から全身に異物が侵蝕は止まらない。

今まで歴戦とまでは自惚れるつもりはないが、受けてきた物理的な苦しみのトップクラスのそれに経験の甲斐なくもう気絶しそうだつた。

「……落ち着け、あと少しだ。踏ん張れ。」

あれ・今、耳許でリンドウの声がしたような……

直後、激痛がおさまったかと思うと・蒸気がブシユーッと氣抜けするような音を出しながらケースが開く。右手首には不恰好な腕輪が縫いつけられ、槍からはあるべき重さが失われて持ち心地はさながら羽根のようであつたのである。人の姿に戻つた巧はこれをサッと空を切り裂くように振るとペイラーに突きつける。

「……おい、こんなに痛えなんてきいてないぞ?」

「言つたじやないか、やる前に? 後戻りは出来ないってね。」

「オッサン、色々とボカしまくると叩き斬るぞ・コレで。」

勿論、彼はご立腹・噴火直前の活火山だつた。その巧を目の前にして、ペイラーはひょうひょうと『おー、怖い怖い』とやり過ごしてみせる。研究者なんて言つているが、

随分と肝がすわりくえない奴だ。まあ、本当に手をあげるつもりはないが……

「あ、そうそう。また言い忘れていたけど……その腕輪は一生とれないから!」

…前言撤回。やつぱり、一太刀いれても良いような気がしてきた。

そんな内心を察したのかペイラーは風のように逃げさつた。文句を投げつける暇すら与えず……。これでは、胸から込み上げる苛立ちを何処に吐き出せばなどと考えていたら肩を氣さくに笑いながら叩くりンドウ。

「おめでとう、巧! 晴れてお前は新人3号……いや、4号か? まあ良いや。これで晴れて俺達、

ゴッドマイターの仲間入りだ。サカキのオツサンはあんな調子だが、こうやつてお前の居場所を用意してくれたのもあの人なんだ。そんなわけで、俺の顔も免じて多目にみてやつてくれ。」

「…ツッ。納得いかねえ。」

気持ちは晴れないが、ここで唸つっていても仕方ないだろう。槍を肩に担いで、溜め息をつくと……諦めたのだと察してリンドウは今後について語りはじめた。

「んじゃ、今後の話。お前さんは俺の率いる第1部隊の配属になる手筈だ。そこには、俺の部下2名に：新人2人がいる。歳はまあアレだが、新人どもと一緒にスタートすることになる。」

歳はアレ……という言い回しが引っ掛けたが大方、リンドウの様子をみれば想像はつく。多分、そこそこ離れているんだろう……歳が下に。新しい職場にひとりだけ歳くつてる先輩のような同僚とか留年した先輩のような同級生みたいな立ち位置ということになるのだろう。ただ、引っ掛かるのは……

「おい、それじゃあ新人の数があわなくないか？」

「……実はなあ、第1部隊のメンバーってのはまだ揃いきってねえんだ。最後のひとりがな、まだロシアから来てなくてな。そういうことだ。」

なんか、いい加減さが漂ってきて不安になる巧。根は善人だろうが、それとは別の意味合いで心配になってきた……

「うん、そうだな：細かいことは気にするな！良いな？んじや、改めましてだ……フエンリル極東支部・第1部隊は貴殿の配属を歓迎する！これから一緒に頑張つていこうぜ？」

「ああ。」

だが、悪人でなければまず良い。リンドウとの握手を皮切りに、異界での仮面ライダーファイズの物語……神を喰らう者たるゴッドイーター、乾巧の章が幕を開けたので

ある。

「ペイラー！何故、彼に神機を与えた!？」

支部長室には怒号が響いていた。支部長が声を荒ぶらせるのはよく知る人からすれば珍しいことだが、相対するペイラーは巧の時と同じくのらりくらりと壁の絵画に目をやっている…。

「何を言つているのかね、ヨハン？彼をゴットイーターにするのは契約の内だろう？」

「ああ、ただの人間なら良いが…彼はオルフェノクと名乗る怪物だ！もし、適合に失敗でもしたりしたら！」

「成功したから良いんじゃないか。」

「それは、結果論だ博士！しかも、よりもよつて…試作型のポールタイプの新型神機を

与えるとは……正気とは思えんよ！」

その時、彼は静かに……不気味に微笑んだ。

「……何を今更……君が正気を問うとはね。」

途端、支部長は黙つた。まるで、泣き所を突かれた弁慶のようにな……  
すると、『これは言い過ぎた……』と謝罪したペイラーだが改めて支部長に向き直る。

「ヨハン、我々は既に幾つもの危ない橋を渡つてきた。それは、少しでも多くの人々を救うためさ。」

「わかっている……わかっているさ。そのためのフェンリルだ。人類の存続……アラガミの駆逐……だから、我々は……」

「私だって、何も考え無しでこんなことはしない。勿論、何かあつたら責任はどるさ

……でも、巧くんの力は飼い殺しにするのは惜しい。君もそう思つたのは事実だろう？」

彼の言い分も確かに認めざらえないところもあつた支部長。確かに未知のオルフェノクの力に神機があれば……より多くの人を救うなことができるのには思い浮かんだ。でも、リスクの側面を考えると無謀な冒険だつた……わけのわからない存在に人を守る刃にして自分たちの財産を預けるなど……

「大丈夫さ。彼を信じてみたらどうだい？ 私は基本、科学的根拠の無いことは言わないけど……今までだつて冒険を重ねてきたじやないか？」

「……冒険か。そんな夢と希望に溢れるような響きではなかつたがね。我々のここまできた道は……」

遠い目をした支部長……憂鬱そうな顔は彼が歩んできた半生が生易しいものではないと語るようだ。決して、明るく誇れるようなものばかりではないと……：

この研究者とはそれらを共に歩んできた戦友であるが、彼の読みきれない腹黒さは困つたものである。

「良いだろう、今回は不間にしよう。勿論、乾巧の存在は本部に伏せる……この極東支部内の機密に規定する。口外は厳禁だ。」

やつてしまつたもの勝ちを認めるようで癪だが、ここは折れることにした。すると、

ペイラーは満足げな内心を奥底に秘めた微笑みを向ける。どうやら、彼の満足いく結果だつたらしい……

「ありがとう、支部長。彼はいつ以来かの興味深い観察対象だからね。感謝するよ。」「今回だけは友人のよしみと彼がもたらすであろう可能性を鑑みてだ。だが、次は無い……覚えておきたまえ。」

「……心しておこう。」

忠告。さて、この男にどれだけの意味と効果があるかは謎だが……気休めの牽制くらいになれば良い。支部長はペイラーが受諾して部屋を後にするのを見送り……やつとひとりになつたのでフカフカの黒椅子にもたれてひと息をつく。

「さて、ペイラー……全てが君の思惑通りに行くと思つたら大間違いだぞ。」

その時、入れ替わりでおかつぱ頭の女性隊員が入つてきた。リンドウと同じ部隊の彼女である。

「やあ、君か。サクヤくん……やはり、乾巧の処遇についてか？」

「はい。やはり、彼の扱いについては納得しかねます！」

「しかし、君の部隊の隊長は既に承認しているのだ……文句は言えまい。だからといって、好き放題をさせるつもりは毛頭に無い。引き続き、彼の監視を続けるように……」

「……わかりました。失礼します。」

彼女も同様に巧の処遇に不服をとする者であつた。得体の知れない存在を身近にい  
るとなればそれは不快感を覚えて仕方ない。だが、自分の上司は耳を傾けず……よつ  
て、その上司たる支部長にまで異議を唱えにいつたが満足いく返答は無かつた。

そのまま、引き下がらざらえず：孤独な廊下の先で彼女は物思いにふける。

(……やっぱり、彼は危険に思う。)

狙撃手としてスコープの先から見た狼の異形へと変身したあの男。人が神々に抗う  
唯一の手段無しで、ヴァジュラを退けるまでの足掛かりを作つた存在。そして、敵か味  
方かわからない……

(……でも、リンドウは彼を信じた。)

ならば

(見極めさせてもらうわ……貴方が本当に信用に足る人間かどうか……)  
エレベーターの前に立つ新米の神を喰らう者に内心で宣言する。

その視線に気がついたのか、彼は振り向いて挨拶がわりに：自分らしく告げた。

「はじめまして。今日から新しいバイトの乾巧だ。」

……はい？ バイト？

「……決まつてんだろう？ 仮面ライダーと……ゴッドイーターのバイトさ。」

To be continued::

## 第弐話 前編

……巧のゴッドダイナー生活が始まるちょうどその頃……

遙か北の地であるロシアは猛吹雪にみまわれていた。視界は真っ白な吹き荒れる粉のおかげで、3割くらいしか辺りを確認できず……おまけに血管まで凍てつくような鋭い寒さに忌々しいと誰もが悪態をつく。

そんな絶対零度の土地を今、まさに飛び立とうとする鋼の巨大な機影……白の暴風の中でも存在感を示す正体はフエンリルの輸送機。これは物資と『ある1人の少女』を送り届けるため……そのエンジンに火を灯していた。

その少女は、お気に入りの赤い帽子を脱いで手元に抱くと……自分の銀の髪を手櫛ですきながら客席に座る。ここは外と隔絶されて明るくて暖かい。外ではコートを着こんだ男たちが騒がしく動いているのが分厚い窓越しに見えた……全く、自分のためにご苦労なことである。

「……やあ、アリサすまない。吹雪がもう少し弱まつたら発つ予定だ。すまないね、待たせてしまつて。」

：そんな彼等を鼻で笑っていると、眼鏡をかけた中年の男が話しかけてきた。外の者

と同じく、コートを羽織り……黄色いバンダナが目印の彼はよく知る仲だ。窓から顔を返すと反対に男には愛想の良い笑みを向けた。

「……平気ですよ、オオグルマ先生。それより、私の神機が凍つていたりしませんよね？」  
「ああ、勿論だ。そうだ、アリサ……極東で君に続く新たな『新型』の神機使いが現れた  
そうだ。君と同じ第一部隊の配属になるそうだが……」

男は自分の専属の医者だ……そして、色々と世話をやいてくれる良い先生。だが、たまにお節介なのが鬱陶しくなるが……

「……名前は乾巧……槍使いという話だ。剣崎イッシンに続き、極東は新型を3人も揃うことになる。流石、最前线といったところだな……」

「オオグルマ先生？」

「……？ なんだね……？」

少女は屈託なく……自分より歳上の男に向かつて笑った。自信に満ちた口は……  
「そんなこと、どうだつて良いじゃないですか？」

……礼儀など構わず告げる。

「なんにせよ…私より優れたゴッドイーターなんていませんから。」

## 【第2話】

「…ふツ!!ふツ!!」

雪に染まる古い寺……そこに、巧の姿はあつた。ファイズに代わる新たな武器の槍：チャージスピアというらしいが、巧はこれを素振りしていた。手に馴染ませるため、ブンブンと振つてはみるもの：性格上の故か今まで長い獲物を扱つたことが無い故か、動きは粗っぽい。巧は巧なりに工夫はしているつもりなのだが、『オラア！』と突きを繰り

出した辺りは隣で見ていたリンドウは苦笑していた。

「いやあ、まあそのうち慣れるだろ？筋は悪くないと思うぞ、うん。」

氣休めを言われると内心、恥ずかしいが自分のせいだ。まあ、良い……突きだした槍を肩に担ぐと、巧は後続してやつてきた仲間たちに目線を向けた。

「紹介するぞ。こっちの美人が橘サクヤ……形式上、俺には次ぐお前の上官にあたる。」

「もう彼女とは自己紹介は済ませてある。」

「あ、そうだっけ？んじゃ、あとは新人2人……ほら、はやく自己紹介しろ。」

狙撃手の彼女：サクヤとは面識がある。あとは後ろの2人の少年：彼等が新人だろう。アサルトの銃身を持つ神機の人懐こそうな赤毛のような茶菓の少年に至つて平凡そうな顔をした銀（それとも灰？）の髪をした少年。後者の彼はリンドウと同型の神機を手にしていた。

「藤木コウタツす！一瞬だけ俺らが先輩だけど、まあ新人同期つてことでよろしくう！」「け、剣崎イッシンつす。よろしくッス……」

何だろう：後者の彼、イッシンはどうにも畏縮しているようだ。まあ、巧も自分はあんまり人相が好まれやすいタイプではないと自覚している。なら無理にコミュニケーションを拡げるよりかはと『よろしく…』と短く済ませておこうとしたが：活発なコウタと呼ばれる少年がくいついいてきてしまった。

「巧さん、コイツさシャイなんで……ああ、でもさその仏頂面はやめといったほうが良いよ。」

「うるさい。コイツは元々、生まれつきだ。」

「ううん……でもさ、俺達の同期だし。仲良くしたいんだけどなあ……そうだ、ニックネームで呼ばうぜ！あんた、巧だから……『たっくん』なんてどうだ？！」

「たつ……！」

おまけに、まさか異世界でこんな呼び方をされるなんて夢にも思わなかつた。戸惑いは隠せないが……そこをイッシンがフォローに……

「……た、『たっくん』さんに、失礼ですよ。仮にも、歳上に。」

「おいお前……」

まわることは無かつた。まあまあ、予想外の展開だがこの程度に突つ掛かつていても仕方ないと『好きにしろ……』と巧はたっくんに折れた。その様子にリンドウはゲラゲラと笑い、サクヤは拍子抜けをした顔をする。

さて、楽しい時間はいつまでもとはいかない。

「おーい、新人ども。自己紹介は済んだか？そろそろ、楽しい楽しい任務の時間だ。」リンドウの言葉に一気に全員の顔が冷水をかけられたように引き締まる。残念ながら、今は楽しいピクニックではなく死と隣り合わせの任務なのである。

「今回の相手はコンゴウ……中型のアラガミだな。本来なら群れを為す知能の高い奴だが今度の任務では単体で確認された。そこで、新人諸君は実践も兼ねてこれを討伐してもらう。今回はサクヤがバツクアップにつくが、オウガテイルといつたザコとはわけが違う。くれぐれも油断はするなよ?」

「おい、リンドウ。お前は何を…」

「ん?ああ、俺はこのあとちよいとお忍びのデートに誘われててね。」

全く、この男は…。呆れていた巧だが、ふと目線をずらすとサクヤが心配そうな表情でリンドウを見ていたことに気がつく。『デート』…なんて言っているが何となく違う意味合いがあるので少し察したがこれだけでは流石に全ては解り得ない。

そして、リンドウは去り際に部下たちに告げる…

「んじや、命令はいつもの3つ。『死ぬな…』『死にそうになつたら、逃げろ…』んで『隠れろ…』運が良かつたら『不意をついてぶつ殺せ!』…良いな?」

「リンドウ、それ毎度ツッコミを入れるのも面倒だけど4つじゃない。」

「ん…じや、細かいことは気にしないってことで。全員、生きて帰れ!勿論、巧…お前もな!」

すると、彼はそそくさと去つていった。ただ、巧は自分に念をおされるなんて思つておらず、…返事を返すことが出来なかつた。

さあ、いよいよ任務の開始だ。真っ白な雪の絨毯の上に降りた一行は寂れた廃寺をゆっくりと辺りを警戒しながら進んでいく……

「コンゴウは聴覚がとても鋭いの。知能も高いし、死角から私達の様子を窺つてるかもしないわ。注意して！」

背後からサクヤの警告が届くが、聴覚云々と言う割には彼女の声はよく通るので如何なものかと思う巧…。ただ、デカイ相手が奇襲をしかけてくると一気に一網打尽にされる可能性もある。彼はオルフェノクの力に加えてゴツドайターになつたことで更に銳敏になつた感覚を目を閉じて研ぎ澄ます……

近くにいるなら、何処かに隠れているはず……

「…たつくんさん？」

イツシンが心配してくる…。その先・古い寺院跡の上……

『ハア…ハア……！』

確かに、異形の荒い息遣いが聞こえた…！

『グルアア…！』

「「！」

サクヤと新入たちはすぐに飛び退き、そこへ巨体が獲物を粉碎しようと着地する。赤

い面をつけたようなゴリラらしきボディ……

「気をつけて！コンゴウよ!!」

…コイツが討伐目標のアラガミ『コンゴウ』。ヴァジュラより一回りくらい小さい中型種…背中の4本のパイプに裂けたような口に牙がズラリと並ぶ様はまさに異形。だが、この程度で巧はビビらない。

「…」のくらいのデカさなら、大したことないな。』

シャンツと軽く槍を振ると彼は躊躇いなく、突撃していた。サクヤが止める間もなく、懷にブスリと撃ち込み間髪いれず頭をシールドパーティで殴りあげる！

「ちよつと!? 神機をそんな乱暴に使つたら…!?

これには、コンゴウは愚かサクヤすら悲鳴をあげざらえない。まあ、巧にとつて何処ふく風だつたが…

そして、ゴロゴロと転がつたコンゴウへ片手を軽く降つて追撃を迫ろうと刹那…

『オオオ……!』

まだ終わらんと異形の背のパイプから風が漏れだした…。はて?と歩を止めた巧…そこへ、サクヤの悲鳴が響く!!

「よけて！風のブレスよ！」

「！」

瞬間、勢いよく飛び退くと弾丸のような竜巻が巧をかすめた。あと少し遅かつたら直撃をもらつていただろう。

こうなれば、流石に見ていられないとサクヤが援護射撃のスナイプ。雷の閃光がコンゴウの頭蓋を貫き、心臓部のコアを粉碎した。

『…グウ……!!』

崩れ落ちる異形の肉体。最初こそ驚いたが、最期はあつけないものだつた…。

「…なんだ、意外と拍子抜けだな？」

「ふざけないで！？私の援護が無ければ……！」

サクヤはカンカンだった。初めて組むメンバーかつ、新人を含めた任務であつたのにいきなり指揮を待たず独断専行をされては仕方ないことだろう……おまけに、貴重な武装である神機を乱暴に扱われては……

『ググルア!!!!』

「！」

その時、サクヤの頭上からもう1体のコンゴウが…！不意を突かれたサクヤは逃げられず、すかさず巧が彼女を突き飛ばしてチャージスピアの装甲を展開。間一髪で異形の

剛腕を防ぎきる……

「…戦いに集中しろ！」

間一髪……でこそあれど、今の状況は芳しくは無かつた。やはり、相手はアラガミでゴリラのような姿だけあつてパワーも馬鹿に出来たものではなく……ゴッドイーターになつた巧ですら圧されていく……！

まずい！と思つた巧はすぐさまウルフオルフェノクへと変身。逆に力任せにコンゴウを押し返してみせた。

『さあ、来いよ。』

調子が良い。ゴッドイーターになつて更に……

自分は戦闘狂なんて微塵も思つていないが、高揚感が彼の闘争本能を煽る。もつと、存分に力を振り回し……昂り……引きちぎり…………!!喰らえ!!!!と……

『ツ!!!』

それに、反応するようすに展開するチャージスピアの刃。刹那、つむじ風と彼は消え：同時にコンゴウの背中のパイプが吹き飛ぶ！直後、異形の背後にヒラリと着地するウルフオルフェノク。

『ちつ……浅かつたか。』

『オオオオオ?!』

浅かつた…あくまでもウルフォルフエノク感覚ではだが、喰らつた側からすれば別。コンゴウはすぐさま、悲鳴をあげて寺を飛び越えて逃走していった。

「逃がすか…！」

P P P P P P P……

「誰？・こんな時に…！」

いざ、追撃せんとしたサクヤ…しかし、よりによつてタイミングを謀つたように鳴る端末。おまけに相手は支部長からようだ…無視するわけにもいくまい。

「はい、こちらサクヤです。……緊急事態？…なんですつて！？」

『?』

何やら雲行きが良くないうようだ…ウルフォルフエノクは槍をおさめて、巧の姿へと戻ると眉を潜める…。すると、任務開始より険しい顔をしていたサクヤが更に厳しい顔をして口を開く…。

「乾くん、このミッショソは中止。支部長から直接、緊急ミッショソの依頼が来たわ…。そして、とりわけ急ぎの……」

Φ Φ Φ Φ Φ

極東支部付近北方上空……

フェンリル輸送機内、格納庫にて溜息がひとつ。荷物がひしめき、薄暗い空間にて少女は呆れと面倒臭さを口から吐き出しながら相棒の入っている身の丈ほどあるアタッシュケースを持ちあげる。

(まさか、対策で組み込んでいた輸送機の偏食因子に逆に反応して大群が寄ってくるな

んで……)

「パチンッ！」と留め金を外せば深紅のボディに黒く輝くガトリング銃身の相棒。これを取り出すやアタツシユケースは適当にぶん投げ、ゆつくりと雲の上へと開いていくゲートへ向かう。すると、荒れ狂うような突風が身を撫でていくが怯むことなく見据えるは夜明け前の遙か雲の彼方……。

…これに紛れて蠢く無数の黒い影。

「ふう……あらまあ、大量ですこと。」

なびく銀の髪を抑えながら、彼女は呟く。数が多い……？それがどうした？

…別に、全て倒してしまえば問題無い。

〔アリサ、極東支部にも支援は依頼してある！くれぐれも、無茶はするなよ!?〕

「平気ですよ、オオグルマ先生。私の実践での実力を極東の方々示す良い機会ですしね。とつとと、片付けますよ!!」

イヤホンタイプの通信機からの恩師の心配する声：まあ、無用なものだが笑顔で応え

ておく。

そして、腰に命綱がわりのワイヤーをフックで繋げ、相棒の銃身を明るくなつていく空へとガチャリ！と向ける。負ける道理など無い……数は多くとも相手は雑魚の寄せ集めだ。この『新型』で最も優れているゴッドイーターたる自分に勝とうなど笑わせてくれるというもの。

「ハラショー…………アリサ・イリーニチナ・アミエーラ、敵を殲滅します。」  
さあ、任務『ショー』の始まりだ……。

極東より遙か北の地、ロシアより……新たなる新型神機使い、『アリサ・イリーニチナ・アミエーラ』は高らかに叫んだ。

〔…〕

……そんな様子を彼女に気がつかれず、無言で見つめる人影。その手には『SMART BRAIN』と刻まれた銀に鈍く輝くアタッシュケースが握られていた。

## 第弐話 後編

「おいおい、マジかよ。」

巧が口から溢してしまるのは無理もなかつた。支部長からの緊急ミッショングリードで慌てて引き返して、極東支部から輸送ヘリ…そして、現在・極東支部北方空域付近上空。眼下は真っ白な雲が荒々しい雪原のようである。別に巧は高所恐怖症なわけではないのだが……悪態を突きたくなる理由とは…

「全く、洒落にならないわね……この数。」

歴戦の勇士のサクヤすら呆れるほどのアラガミ…………アラガミ…アラガミアラガミアラガミアラガミアラガミ。例えるなら、地面に落ちた飴に群がるアリの大群か腐肉に集まる蠅の数百倍といったところか……

種は黒い卵型のボディに禍々しい単眼と女神像がついた『ザイゴート』。肉体がパツクマンのようにバツクリと口が開くから気持ち悪い。しかも、これが数えるのもうんざりするような群が輸送ヘリより遙かに大きい輸送機を覆い尽くさんばかりにいるのだから吐きそうになる…。

「なあ、これ全部か？相手にするの……？」

「ええ。今回の任務は救出だから、免れないわね。」

サクヤからの確定通告。それにしても、この数をどうやつて相手取るというのだろう……このへりからでは無理があるので……

「まず、乾くんとイッシンくんには機体に直接、飛び移つてアラガミの駆逐を。私は後方から援護するわ。良いわね？」

……本当、無茶を言つてくれる。テメエもやつてみろよソレと言いたいところだが、口に出すより早くへりが上昇していき言い損ねてしまった。畜生め……やがて、輸送機の頭上へとやつてきた彼等はあるものを目撃する。

「サクヤさん、巧さん、あれ!!」

イッシンの叫びに目を凝らせば既に機体の表面に張り付き、戦っている少女が。赤の帽子にミニスカ……だが、深紅の神機を振り回し……迫りくるザイゴートたちをバツサ、バツサ、と切り捨てる。いる。

「彼女が今回の最重要対象ね。良い？なんとしても、あの娘は連れ帰るのよ。「うっす！」

「…」

とにかく、援護をしなくては……

後方支援はサクヤに任せて、輸送ヘリから飛び移る巧とイッシン。手短なザイゴートをぶち抜いてクツジョン代わりにすると、アリサは彼等に気がついた。

「極東支部からの増援ですか…？」

「そうです！ 只今から援護にうつります…」

イッシンはすぐに彼女へ駆け寄ろうとしたが…

「必要ありません。」

……はい？

「うろちよろされるとかえつて邪魔です。役立たずは引っこんでいて下さい。」

「いやっ……あの……その……」

何故？いきなり初対面から役立たず言われたんですが……

戸惑うイツシンを尻目に神機の深紅のブレード刀身を収納し、ガトリング銃身を展開するアリサ。そのまま、盛大に弾を轟音をたて雨霰と撃ちまくりザイゴートの一団を叩き落としていく……。

「……次ッ!!」

そして、身体を反転させると腰についている命綱のベルトを伸ばして機体の側面へとダイブ。張りつくザイゴートをえげつない銃撃で蹴散らす……更に、またブレード形態に神機を戻すと駆け上がりながら、異形をなぎはらつてまた機体の背に着地した。  
(すゞい……)

イツシンは息を呑む。同じ神機使いでありながら、彼女は遙かに先を行く…例えるなら、刃の先端のように鋭利に感じられた。これに自分が続かねばならぬのだと……  
「…何、ジロジロ見てるんです？」

「……あつ、いや…」

そんな視線に気がついたのか、アリサは苛立つてしまつたようで慌てるイツシン。その時……：

『シャアアツ!!』

「??:ちいツ!!!」

不意をつき彼女の背後からザイゴートが襲いかかる！咄嗟に銃身を反転させようと  
したアリサ……

ズビュツ!!!!

『ギイ!?』

「!」

だつたが、寸前で槍が異形の肉を後ろから串刺しにして投げ棄てた…。そこには、  
チャージスピアを構える巧が睨みつけるように立っている。

「おい、クソガキ。役立たずかどうかはちゃんと見てから判断しろ。」

アリサも佇まいからして判つた……この男、ただ者ではない。イツシンとは違い、存  
在感に重みがある…そう経験によつて積み重ねられた風格の重みだ。

されど、アリサはそう易々と臆したりなどしない。

「へえ？・貴方が、3人目ですか？・随分と偉ですが：極東は先輩を敬うのがしきたりではないんですか？」

「あ？」

「神機使いになつたのは私が先ですよ？なら、私を敬うっていうのが筋じやないです？」  
イツシンは二度めの絶句。信じられない発言の二発目はよりもよつて巧に……これは怒るだろう。胸ぐら掴んだりワンパンしてもおかしくない……

しかし、巧は……

「ハツ……笑わせんな。」

「…？」

少女の煽りを鼻で笑いとばす。何故なら……

「俺のほうが、歳も…そして、人間を守つてきた数もお前みたいなひよっこより遙かに上だ。大口叩くなら、世界の危機の2つや3つ…乗り越えてみせろ！」

ゴッドイーターとしては後輩でも、彼は彼女より長く生き…その分、救つてきたのだ……『仮面ライダーファイズ』として…幾度となく世界の危機を…多くの人を……それが、たかが十代のピーピー言つている高飛車な小娘の戯れ言など真に受けるものか。

「ふんっ！」

勿論、口だけではない。巧は勢いよくザイゴートたちへと立ち向かっていき、アリサの倒した数に迫らんと次々と斬り裂いていく…。対して、アリサは不快そうにしながらも銃身を構えて目の前の異形の軍勢を見据える。

「…何ですか、それ。まあ、良いでしよう…お手並み拝見といきますか!!」

(俺……完全に蚊帳の外ツス……リンドウさん。)

因みに、誰も孤独感に苛まれるイッシンに気を留めてなかつた。

Φ Φ Φ Φ Φ

……その頃、ヘリではサクヤが狙撃を必死に行い：巧やアリサの手の届き辛いところへのフォローへとまわっていたが、あまりのザイゴートの多さに焦りを感じていた。全く迎撃が追いつかないどころか、時が経つにつれ増えるばかり……これではキリが無い。

（この数、いくらなんでもおかしい……何処かにこの群れを率いるボスがいる？）

なら、可能性としてあげられるのはボスに相当する個体。アラガミは神なんて呼ばれているが、無機質な物体でもなくエネルギー体でもなく『生物』であるのは確か。殺せば、そのアラガミは死ぬ……

故かは知らないが、時たまにライオンや狼のように群れを率いる強い個体がいたりする。取り敢えず、アラガミに性別の概念や機能は無いようだが強い個体ほど自らに並ぶアラガミや数多くの下級クラスのアラガミを引き連れていることがたまにあるのだ。それは、単体でいることよりも狩りの成功率をあげ……最低限の犠牲で被害を抑えることもできる。……ならば、この大群の中にボスに相当する個体がいてもおかしくはない。スコープのレンズをあちこちに向けてザイゴートの影を搔い潜るように捜し……つい

に……

「見つけた！……………あれは、サリエル!?」

ザイゴートよりも巨大で……雲に紛れるように飛翔しつつも、圧倒的に違う存在感を放つ青のドレスを纏う令嬢のような異形。一見、華やかなで見とれてしまいそうになるが……冠の单眼はザイゴートと同様は間違いなく人に仇なすアラガミ。その名は『サリエル』……ザイゴートの進化したと言われるヴァジュラに並ぶ大型種。

(あが、この群れを…………でも、ここからじや!!)

しかし、見つけたとてサクヤの射程圏からはあまりにも離れ過ぎている。これでは弾丸も有効なダメージを与えるれない。

「ねえっ！もうちよつとヘリを寄せられない!!」

「無茶言わないで下さいよお!!こつちも袋叩きにされちまいますよ!!!」

ダメ元でパイロットにヘリを近づけるように頼んでみたが、危険すぎるとやはり無理。さあ、どうする？ サリエルを倒すなり撤退させれば群れは散々になるだろう……されど、今はこの手を打つ手段が無い。こうなれば……と、サクヤは通信を繋ぐ。

「イッシンくん、きこえる？」

【こちら、イッシン…どうしたつスか？】

「北東の方角に群れを率いているボスがいるわ！そっちから、狙撃できない？」

【はい!?無理ツすよ!!今、どんな状況かわかつてます!?】

「こつちからじや、有効射程外なの!どうにかならない!?」

【俺の銃身は、ショットガンだから無理ツす!アリサちゃんはアサルト……あつ、たつくんは確かスナイパーだつたはずツス。】

よりもよつて、面倒な奴に。仕方ない、任務が何よりも優先と巧に通信を繋ぐことにした……

Φ Φ Φ Φ Φ

「…………全く、新人だからつて人使い荒すぎやしねえか?」

飛び交うザイゴートたちを斬り刻み、愚痴る巧。おまけに、狙撃までしろとかこんな  
人食い風船軍団の真つ只中で正気とは思えない。  
というより……

「…………銃つてどうすんだ?」

隣にいたアリサは呆れたと溜息をつき、見かねたイツシンが駆け寄つて銃形態の展開について教える。

「あの、ガンフォームはですね……こをクイツと……」  
「これか？」

すると、ガチャーン！と音を立てて巧の槍は刃先を鐔へと収納し：入れ替わりに細く長い銃身が刃があつた所へ展開された。成る程、これが銃形態というやつか。：つて、感心している場合じやない。スコープを覗きこみ：ザイゴートの群の先にいるサリエルを狙う……

が……

『シャアアアアアア!!!!』

「うおつと!?」

不意にザイゴートが頭上をかすめ、その拍子にトリガーを引いてしまい弾丸はサリエルをかすめていつてしまつた。無論、そうなればどんなに馬鹿な相手でも狙われていることに気がつく…。

『オオオオ……!!』

すぐさま、自らの軍団に指示を出すサリエル。敵は自分に照準を向けた愚か者たち……ボスの一聲で黒の異形たちは大挙として津波のように巧たちに押し寄せてくる！

「うおつ!?」

「くっ！」

咄嗟にイツシンとアリサは神機の盾を展開し、死の波を耐える……しかし……

「ぐつ!?ううう…!」

銃形態のままガードをしていた巧はザイゴートの群に押されていつてしまう。彼は知らなかつたのだ……銃形態では盾が展開できないことに……

やがて、輸送機の隅まで追いやられ……足がズルツと空へと滑り落ちて……

「何やつてるんですか!?」

いく直前、少女の手が巧の腕を掴む。間一髪、アリサに助けられ……彼は引き上げられた。これを見かねたイツシンが叫ぶ！

「一旦、退きましょう！体勢を立て直さないと…………！」

リンドウと同型のチエンソー刀身を振り回し、迫りくるザイゴートをバツサバツサと斬り捨てていくか……いかんせん、数が多くてキリがない。巧やアリサも銃形態で応戦

するも、すぐに弾が尽きてザイゴートたちに囲まれる。

「あらあら、逃がしてくれそうもないですね。」

「くそつ……」

巧は思う…………こんな時、『アレ』があれば……

『アレ』さえあれば、こんな数の不利など容易に突破が可能なのだが…………それは、故郷たる異界へ置いてきてしまつたのだ。無いものねだりしても仕方ない……

だが……

【Battle mode】  
『B:i』

輸送機の倉庫でムツクリと起き上がる重厚でメカメカしい影。人形のボディを動かし、閉じかけているハッチに向かうとバイザーアイをチカチカと光らせる…………今、こ

「……」の先には自分の『主』がいると……

同時に、巧も気がついた。何処かで聞き覚えのある音声が異形の合間から確かに響いてきた……。されど、ありえない：アイツは居ないはず……

『  
B  
i  
』

……顔をあげれば平然と自分の目前を飛んでいるのは何故だろう？あと、車輪の盾がこちらに向いている…………まさか……

「おい、お前ら!! 伏せろ!!」

……巧の一声に何事かとイツシンとアリサ…………されど、アイツは待たず…………

「「ちよつ!?」」

盾から容赦なくマシンガンを放つ。イッシンはあわててシールドを展開し、アリサは身を伏せた：

おかげで、ザイゴートはろくに傷は与えることは出来なかつたものの：集中した陣形を崩し、離散していく：。そして、巧の前にかつて共に戦い抜いた『相棒』がジエット噴射しながら舞い降りる。

「…やつぱり、お前か。」

『B.i』

銀のボディが心なしか誇らしげに見えるのは気のせいだろうか：バイザーアイを輝かせる人間よりも一回り大きいくらいのロボット。背中と左腕のバイクの車輪らしきパーツがなんとも印象的でイッシンは胸の『 $\Phi$ 』のマークとかカツコいいな…とか戸惑いながら思つていると……

「当たつたら、どうすんだよ！」

ガンツ！

「!?」

巧はこのロボットを蹴つ飛ばした……うん、何の躊躇もなく蹴飛ばしたのである。一応、助けたのにあんまりな扱い…………流石に、アリサすら啞然としていたが：ロボットは立ち直ると平然と立つていた。

「…というか、なんだってここに……」

それはそうと、巧はコイツが何故ここにいるかが分からなかつた。この世界に来る前、まだ生きていた仲間に諸々と一緒に託したはず……でも、目の前のコレは間違いないなく本物の『オートバシン』である。

「よう……」

すると、不意に新たな人物の声に巧は振り向いた……そこに立つのはベルトからオレンジに輝く2本のフォトンストリームが巡る……すでに変身する者がいないはずのライダー…………

しかし、顔を『X』のラインが走る紫の複眼を輝かせるはこちらも間違いない『仮面ライダーカイザ』であつた。彼は銀のアタツシユケースを投げ渡すと短く要件を伝え る。

「忘れ物だ。」

「！」

何ということだろう……確かにそれは自分が置いてしまった『忘れ物』。留め金を外して開ければ確かに見慣れた銀のメカメカしいベルトに時代遅れな折り畳み式な上に大きめな携帯電話……その他にカメラや望遠鏡など……

知つてゐる。自分と一番最初の世界の危機から何度も運命と死線を潜り抜けてきた相棒だ。

「……感謝しろよ？……なつ、巧？」

……これを持つてきたカイザは何者なのか？本来の所持者はとつくに死んでいる。ましてや、本来の主ならこんな軽い調子なわけが無い……むしろ、もつと追い込まれるのを待つか見殺しにしていただろう。また、別の変身者ならば……『自分と同じ（＝人であらざる者）』ということ。誰なのだ……？

「お前……」

「あ？……もしかして、わからない？俺だよ、俺？なあ？おい……！」

……いや、誰だよお前？

あ、そういうえば何となくこんな奴いたような……

「ちよつと!? 3人目!! 何してるんです!？」

とつ……ぼやぼやしていたらアリサの怒号が飛んできた。まあ、ここは戦場なのだから仕方あるまい：むしろ、変に場馴れしてしまい余裕がある巧がある種おかしいのか……

やれやれ、と溜息をつきながら愛槍で寄ってきたザイゴートを飛行機の装甲に縫いつけてアタツシュケースの中身：『ファイズギア』をとつて腹に巻く……

「待ちくたびれたぞ。」

別にコレに意思があるわけではない。でも、何気なく話かけてしまうのは愛着があるからだろう……

滅多に見せぬ仮頂面から垣間見える微笑を覗かせ、携帯電話『ファイズフォン』に【5……5……5】と入力し、最後にEnterをプッシュ：

【Standing by……】

キレのある電子音声にサイレンのような駆動音は準備完了の証。ファイズフォンを再び折り畳み、頭上に掲げて彼は叫ぶ！

……幾度となく、世界を救ってきた仮面の英雄たちが口にする言葉！

「…  
變身!!」

【C  
o  
m  
p  
l  
e  
t  
e】

T  
o  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e  
d  
…  
…

## 第三話

【Complete】

……その時、辺り一帯が目が眩むほどの真っ赤な光に包まれた。

ザイゴートたちは怯み、イッシンやアリサも何事かと巧にへと視線を向ける。

「…………たつくん……さん？」

やがて、光が晴れていく先……そこに乾巧の姿をイッシンが瞳に映すことはなかつた  
 ……。そこにいたのは銀の装甲に真紅のボディラインが走る漆黒のスーツに仮面。『Φ』  
 を模した複眼と真紅の輝きが逆るフォトンブラッドのラインが全身へと巡るこの姿は  
 ……

『仮面ライダー555〈ファイズ〉』

巧の人々を護るための力であり、幾度となく世界を救つてきた救世主。まさに危機へと駆けつけたヒーロー…………

「……やつぱり、ファイズ<コイツ>とは縁が切れないようだな。」

巧・仮面ライダーファイズは静かに笑う。腐れ縁とはまさにこの事だろう：オートバジンからファイズエッジを抜き放ち、閃光の刃でザイゴートを斬り払いながら再会の想いに浸る。背後で斬られたザイゴートたちが『Ω』の紋章を浮かべて次々と灰になっていく……ああ、この感覚：身体が本来あるべきものを取り戻したようだ。

一方、他の人々も突然の事態に：特にアリサは混乱をきたしていた。

「な、何なんですか?! 神機も使わないでアラガミを……!」

「たっくんさん……カッケエ。」

そんな彼女彼等をよそに、ファイズは彼方にフワフワと浮遊するサルエルを睨む。神機でこそ当てられなかつたが、使いなれたこれなら距離を補う方法など熟知している。ファイズエッジにミッショントメモリをスロットすれば、電子音声と共に血染め色の刃が更に激しくフォトンブラッドで輝き……

【Exeed charge】

「……はあッ!!」

これを一気に振り抜き、紅の斬撃を飛ばす……斬撃は次々とザイゴートたちをバラバラにしていき、最終的には逃げ遅れたサルエルの左下半身を切断。ふらふらとバランスを失つたこのタイミングにファイズは叫ぶ！

「サクヤ!!」

「…………この位置なら!!」

銃身から迸る弾丸。一閃したそれはサルエルの胴体部にあるコアを容易く粉碎し：その生命活動を停止させた。同時に指揮するリーダーを失つた群れは散り散りになるは共食いをするわで呆気なくバラバラになつた。これで、ひとまずと……  
「動かないで下さい、乾巧……！」

「……」

済むわけもない。アリサから突きつけられる銃口は何かデジヤヴを感じるが……これをカイザが制止した。

「まあまあ、大丈夫だから……な、アリサちゃん。」

「…………その声、海堂さん!?」

「やつぱり、お前か……海堂…………」

お互ひに変身解除すれば、カイザの素顔は巧のよく知る人物。チャラい髪のオツサン

：かつての戦友『海堂直也』だ。そして、今や唯一の巧の仲間の生き残りでもある。しかし、何故に彼もこの世界に？彼もまたサガラに連れてこられたのだろうか。

「積もる話もあるだろうが、取り敢えずあとだ……ここは場所が悪すぎる。」

☆★☆★☆★

### フエンリル極東支部 支部長室

：本来の部屋の主である者はおらず、代わりに副支部長とも言える男であるペイラー・榎がいた。やはり、狐目といい毎度の含みある笑みが信用ならないのだが取り敢えず、支部長よりはマシかもしないと至る巧。更に、ここにはアリサと海堂にサクヤ：加えてリンドウの姿もある。議題は間違いなく……

「やあ、諸君。先の作戦はご苦労。功績を労いたいところだし、極東支部の新たな仲間の歓迎をしたいところだけど……まず話あわなくちやいけないことがある。勿論、海堂くんと乾くんは……解っているよね？」

「…」

「これだろ？…つと、デスクにそれぞれファイズギアとカイザギアを置く。鈍く銀色に輝く2本のベルトに全員が息を呑む…それはそうだ、自分たちの技術とは違うテクノロジーそのものが目の前にあるのだから。これが、アラガミを倒したとなれば尚のこと…すると、ペイラードは確かめるように口を開く。

「……話してくれるね？」

……それから、巧は語った。己の世界で起こつた人間と人間の進化形『オルフェノク』との戦いを…そして、自分や海棠もオルフェノクで人間の味方『仮面ライダー』として戦つたこと

……オルフェノクの王と呼ばれる存在を倒し、戦いに終止符を打つたこと

……数年後にあたる今、お互に謎の森を通つてこの世界にやつてきたこと

「まあ、俺はロシア……巧は極東だつたつてことだな。で、ロシアで縁あつてアリサちゃんの世話をになつたわけよ俺！」

「勝手についてただけじやないですか。まさか、ここまで来るのは思いませんでした

が……」

海堂の来歴は大体わかつた。まあ、勿論……

「……とにかく、そんな話は信じられるわけありませんよね。」

アリサの一言で一蹴。サクヤは愚か巧に比較的に親いリンドウさえ苦々しい顔をしていた……だが、ペイラーのみがフムフムと頷く。

「いや、彼等の話も強ち嘘でもなきそうだね。スマートブレインという会社だが、こちらの歴史では存在していない。そして、このベルトの技術も該当するものは見当たらない……加えて巧くんのもう1つの姿のことを考えれば……」

意外だ。このオツサン、地味に話が解るじやないか……解ることが腹に何かあるのではと疑いたくなるが頑なに否定されるよかマシ。すると、ペイラーはニコッと巧たちに微笑んだ。

「うむ、私は君の話に信じる方向に1票を投じよう。では、その1票を確かなものにするために……このベルトを少々貸してくれないかね？」

彼の狐目が少年の瞳のようにキラキラしていたのは気のせいじやないだろう。ここで拒否権は無いと見た：『好きにしろ』と巧はベルトを彼に託す。まあ、ゴッドイーターをやる上でなら神機があれば充分だ。

となれば、次は海堂の今後だ：彼はどうやらゴッドイーターどころか正規のフェンリ

ル職員でもなく、勝手にロシアからついてきたらしい。

「……で、海堂くん。君のカイザの力についてだが……ロシアの幹部クラスの誰かが把握しているわけではないのだろう?」

「ま、防衛班のうち何人かくらいかな。一応、掃除係になつてますから俺。」

「じゃあ、極東支部の掃除班兼防衛班に転属するよう根回ししておくよ。これで、問題なしだ……あ、勿論だけど支部長にはあとで方向しておくからこの事は他言無用でお願いするよ。特にサクヤくんとアリサくんは……」

こちらも一安心……なのだろうか。予め釘を刺されたサクヤとアリサは隠しているが、表情は穏やかではない。多分、真っ先に支部長へ告げ口するつもりだつたのだろう。今、極東支部から彼が離れていたのはせめてもの幸いだ。これで一段落：

「……は、博士!!」

ドタドタと雪崩れこむように支部長に飛び込んできたコウタ。息をきらし、その顔は

青い……ただ事ではないようだ。すぐに、イツシンが駆け寄り事情を問う。

「コウタ、どうしたツス……？」

「はあ……はあ……、エリツクが!! エリツクが……アラガミに……！」

「「「一.」」

それは、ひとりの戦士の訃報を伝えるものだつた。

☆★ ☆★ ☆★

極東支部ラウンジに運び込まれる1つの棺……

サングラスの青年が静かにそこで眠つており、周りは哀しみにくれる人々で溢れてい  
た。ある者は涙を流し……ある者はやり場のない感情を声にして叫んでいた。

ペイラードと巧たちが駆けつけた時はまさにピーカクの時間。もう葬式と言つても他言

ではない。

「…任務中、背後からオウガテイルに。ヴァジュラと戦つて疲弊したあとを突かれたらしいよ。くそつ、俺も任務に同行していれば……」

「よせ、コウタ。今さら、たられば言つたところでどうにもならねえよ。」

「……リンドウさん」

「巧、イツシン…これが俺達の職場だ。普通に誰であろうと死ぬ…どんな天才だろうと幸運だと死は容赦なく襲いかかる。次にああなるのは自分になるかもしけない…だからこそ、恐れることに呑まれるな。立ち向かうことを辞めれば次はお前たちがああなる。解つたな？」

…世界は無慈悲である。特にこちらの世界はあまりにも近くにある…それが、ゴッドイーターでも例外ではない。横たわる棺と彼が示す現実。巧は死した仲間の顔など知らないが、悲しむ者たちと共に黙祷を…

「……何をメソメソしているんです？」

「捧げようとする一言が空を裂いた。単純にただイラツときたから……それだけだとアリサは苛立つ表情で訴える。

「ロシアから来るなり葬式ムードだなんてうんざりなんですけど？それに、惜しむ理由も無いじゃないですか？人なんて毎日何処かで死んでいるし、それに死んだのが旧型で私が新型……総合的に見ればプラスなのは一目瞭然。さっさと棺（それ）：片付けて頂けます？」

「アリサくん、よしたまえ……！仮にも死者の冒瀧は……！」

ペイラーが嗜めるがもう遅い。青フードの青年が棺の周りの団から抜け出して歩いてくれとグイッ!!とアリサの胸ぐらを掴みあげる！

「……！」

「あら？ 殴りますか……？ 何方か存じませんが、下手なことはしないほうが良いんじゃありません？」

：握りしめられ、振り上げられる拳ツ！だが、それを巧が止め：アリサを引き剥がす。

「おい、よせ。こんな奴、テメエが殴るまでも無い……」

――バキツ

「!」

直後、青年の代わりにアリサを殴る巧。ふつとばされたアリサは手刷りにひしやげるほどの勢いでぶつかり、周りから悲鳴があがる。静かだつたが……死んだ者の顔も知らなかつたが……確かに、怒りで燃えていた。

「…」

睨みで返すアリサ……あちゃー……と頭を抱えるリンドウ。イツシンや他の面々が狼狽える中、新しい仲間との生活は……最悪のスタートをきつた。

To be continued:

## 第四話 前編

……なんで、

……なんで、お前たちまで先に逝つちまうんだよ。

清潔なベッドに横たわる彼女はもう動かない。

クリーニング屋のカウンターで眠る青年も目を覚ますことはない。

「巧……本当に俺達だけになつちまつたな。」

海堂の言葉が……とても重く、胸の中に響いた。

本来、最初に消えるのは『俺』だつたはずなのに……

## 第四話

「…」

目を覚ますと薄暗い医務室らしき部屋。どうも頭がフワフワして意識が定まらないが心地よいこの時間はアリサが好きだった…。凛と張りつめている顔をする必要など無いし、だらけてても何も誰も言わない。

……でも、あの夢は何だつたのだろう？

「やあ、アリサ…調子はどうだい？」

「オオグルマ先生…」

視線を傾ければそこには見慣れた黄色いバンダナの主治医が白髪をかいて覗きこんでいる。あと、煙草くさい……

「全く、駄目じやないか。極東支部に着いて早々に騒ぎを起こすなんて……一体、どうしたんだ？」

思い出す……ラウンジでの出来事。自分は死を喰つた…そして、乾巧に殴られてそのままこの主治医にメディカルチエックと称してここに連れてこられたのだ。

この流れを思い出すや一気に顔をしかめるアリサ。

「だつて…！私はアラガミを沢山殺したんですつ！あの役立たずで死んだ人とは違うのに…！褒められて良いはずなのに、私を殴つたんですよお？…うつ、うつ、私…あの人、嫌いですっ！大嫌いです、うわあああああああああああああああ…!!!!」

呂律もあまり回らず、挙げ句の果てに泣き出す始末。もしイッシンやサクヤが見たらその豹変ぶりに自分が知るアリサの像を疑うだろう。

主治医も参つたな…と顔に手を当てるときやリンドウといった第1部隊の面々が

写った写真を手元からファイルにしまい、小瓶を取り出すとそれに注射器をブスツと差して中身を吸い上げる……

「やれやれ、精神をまた随分と病んでいるようだね：仕方ない、今日は少し強めのお薬を打つから少しチクツとするよ？」

☆★ ☆★ ☆★

リンドウの部屋……そこに集まるのは第1部隊のメンバー。といつても、アリサはないが……

ホログラムで映し出された窓：これはフェンリルの職員の居住スペースが地下に根を張るように存在しているからだ。それに、リンドウが寄りかかり：サクヤはベッドに腰掛け、残る男たちと海棠はソファーに座っている。勿論、集まつたのは話があるからだ。

「ああ、諸君：先の作戦はご苦労様だった。エリックのことは残念だつたが仕方ないさ、この業界ではよくあることだ。明日は我が身、お互に気をつけようぜ。」

リンドウが無理に明るく振る舞うが、そんなことでこの場の空気が晴れるわけも無い。

まあ、まずはだ：サクヤは巧に加えて海堂という不確定要素まで増えたこともあり、苛立ちが滲み出つつあつた。

「海堂さん……で良いかしら？ 貴方は一体、何者で何のためにこの極東支部に来たの？」  
「それはあのお狐目博士の前でも言つたんだが……何者かはやつぱり、この姿になつたほうが早いか？」

すると、海堂に不気味なシルエットが重なり：彼は蛇の異形『スネークオルフェノク』へと変身。これを見るや巧以外の面々は驚き、それを確認するや彼はすぐに人間の姿に戻つた。

「わかる……？ つまり、俺は巧と同じつてこと。まあ、あと目的か……うん、巧の噂を聞いてやつてきたつてことぐらいだな。つーか、お前さなんでファイズ忘れたの？」  
「……色々あつたんだよ。」

主に謎のD.J. Sの不始末である。おかげで、ヴァジュラの放電を生身で喰らう羽目になつた…。

さて、今度は巧が海堂に問う。  
「そういうお前も、あつちで何やつてたんだよ？」

「あー…今、それ訊いちゃう？訊いちゃうか……」「？」

オルフェノクの王と戦いその後……巧と海堂は離れていた。今、この世界で再会するまで何をしていたのか。そこだけは支部長室では語らなかつた…そして、今も何やら渋つている様子が窺える。すると、気をきかせるイッシン。

「俺達がいると話辛いツスか？」

「…まあ、そうだな。一応、『俺達』の問題だし……」

俺達＝オルフェノクということだろう。巧はすぐに察した……どうやら元々の世界で異常が発覚し、海堂はこれを知つた。出来ればゴツドイーターたちを巻き込みたくないという想いもあるのだろう…自分たちで解決すべきという考え方かそれとも不信故にか…躊躇つている。

すると、見かねて…おもむろに口を開いたリンドウ。

「…あのか、なんかこう……巧や海堂が来たのは…まあ、その偶然じやねえと俺は思つてる。何かが起ころる時は必ず兆しがあるもんだ…。そして、事が起こつた時に俺達、ゴツドイーターは力無き人々の盾でなくちやならない。そして、ひとりでも…命ある限り救うために戦う……そう信念を持つて俺達は今日まで來た。だから、世界を救つたつて言うなら…俺らの気持ち、解ると思うからよ……その、話してくれないか？な…？」

「…」

海堂は暫し、悩んだ：不器用だつたがリンドウの言葉に謀り事は感じられない。頭をボリボリかきながら、巧のほうを向けば：彼は頷いて返す。なら：と腹をくくり彼は語りだす。

「わかつたよ、話すから！これは俺が巧と離れてた時の話だ。俺はな、生き残りのオルフェエノクの世話をしたんだ…：勿論、人間側のだよ？でな、ベルトを造つたスマートブレインのデータベースに生き残りの情報が無いか漁つてたら、『想定外のもの』を見つけちまつたんだ。」

「想定外…？」

巧は首を傾げる……そして、海堂は告げた。

「俺達のベルト以外に……もう2本の発展型とでも言うべき『帝王のベルト』があるらしい。」

「！」

衝撃。巧のファイズ、海堂のカイザ、もう1本のベルトのデルタ……これらを巡り、巧たちはオルフェノクと戦いを繰り広げたのだ。それに加えて、新たにベルトがあるなど予想すらしなかつた。

「そいつはほぼ完成していたらしいが、それを待たずに俺達が決着をつけちまつた。んで、帝王のベルト未完成のまま埃を被るはずだつたんだが……そのベルトがスマートブレインの研究施設から持ち去られた痕跡があつたんだよ。どうやら、研究員の誰かが持ち去つたと見た俺はその足跡をずつと追つてきた。そして、…………恐らくベルトはこの世界の『ショツカー』と呼ばれる組織にあるところまではつき止めた。」

「ショツカー……だと!?」

ショツカー……仮面ライダーを産み出したはじまりの悪。世界征服を企む秘密結社

の殆どの雛型と言つても良い。その陰謀を他のライダーたちと共に幾度となく叩き潰してきた。よくもまあ、毎年毎年復活してくれるものだと思つていたが：まさか、この世界にまであるとは巧も呆れざら得ない。

「やつぱり、知つてるよな巧。この世界だとフエンリルの下請け企業つてことになつてゐるが：明らかに他の企業とは待遇が違う。唯一、エイジスに本拠地を置くことを許され：人間も資材もそちらで妙な動きをしてやがる。信じるつて言つた手前だが：フエンリルもこの件に絡んでると見て間違いない。」

悪の組織と世界を牛耳る製薬会社：組み合わせ的に最悪としか言い様が無い。全く、どうしてこう厄介事はさらに面倒になるのか：

そんな傍らでリンドウは『やはりな…』と領く。

「よりによつて、またショツカーカよ！ いい加減にしてくれ…！」

「なんだかショツカーカーでも派閥争いがあるんだらしいが：派閥ごと毎年、力ある誰かが担当するつてわけらしいぞ？ 全く悪の組織もなんとやら…。」

「しかも、何だつてこんな世界に…！ 元の世界に帰る方法だつて検討つかねえつてのに  
!!

個人、個人の繋がりであるライダーとの違い故か、組織という体裁：まあ、色々とあ  
るということか。取り敢えず、帝王のベルトの悪用阻止・回収とショツカーカーの壊滅が目

下の目的となりそうだ。フエンリルに睨まれるかもしれないがこの際、仕方ない。成るようにならねえだ。

「あ、そう言えば巧・ソーマが呼んでたぞ？」

「…は？」

…そんな矢先、リンドウの一言に巧の苛立ちが彼に向く。

「悪い悪い、タイミング無くて紹介して無かつたな…俺たち第1部隊のメンバーだ。気難しい奴なんだが…確かに屋上のヘリポートで待つてるとか言つてたな。」

まだ、第1部隊にメンバーがいたのか……というか、それはどれくらい前の話なのかいい加減なリンドウの態度に気にすらしたくない巧だった。

To be continued:

## 第四話 後編

フェンリル極東支部 屋上

夕刻

「……きたか。」

待ち構えていたフードの青年は見覚えがあつた。浅黒い肌・銀の髪……確かに、巧がアリサを殴りとばした時、先に彼女へと殴ろうとした彼だ。そんな彼が何用かと巧と海堂は顔を見合わせる。

「いきなり何だつて顔だな、乾巧。お前の話はまあ耳にしている。俺の名前はソーマ……別に覚えなくとも良い。」

第1部隊は中々の曲者揃いと解していた巧だったが……このソーマと名乗る青年……番の面倒さだとすぐに察した巧。すると、『お前に1つ言いたいことがある……』と彼は続けた。

「……あの時、例のロシアの新人を殴つただろ？ 何故、お前が殴る必要があつた？」「ああ……なんだ、そんなことか。巧は納得し、語る……」

「別に、殴りたいと思つたから殴つた…。どんな優秀な奴だろうと人の命を嗤う奴は許せない、そう思つただけだ。ま、お前のような一般のゴッドイーターが事を起こせば面倒だろ?」

「…ただのゴッドイーター…か…。」

そんな彼にソーマは意味ありげに微笑む。何を思つたのかは巧や海堂には解らない…ただ、自嘲を含むような横顔は印象に残る。

「フンッ…なら新人、ようこそクソツタレな職場へ。お前のようなお人好し…嫌いじやない。」

「歳上はせめて名前で呼べ。宜しくな。」

握手は交わさない。ベタベタと絡み合うのはお互い柄じやない…そんな匂いを感じつつ巧はソーマを背て見送る巧。そして、アリサも含めて彼もとなると第1部隊はかなり曲者揃いだと改めて実感して『ふう…』と溜息をついた。

「へえ、アイツがソーマ……何かどつかの誰かさんとそつくり…チラリ?」

「…なんだよ?」

海堂のリアクションも鬱陶しい。さつきはシリアルスな空氣だつたから我慢したが、コイツは元々真面目な雰囲気に馴染む奴でもないのを思いだし…ニヤニヤ顔をぐいっと押し退けて屋上のドアを開け…：

ガタツ

「？」

……開け？

ガタツガタツ

「…は？」

……開かない。ドアノブをいくらまわしても、押しても引いても、殴ってみても、開かない。どうした？と海棠も覗きこみ、『あかねえ…』と呟くや『どれどれ俺に任せてみい？』と彼は思いつきり蹴つ飛ばすがただ衝撃で足を痛めてのたうちまわるだけだった。なにしてんだコイツ？

仕方ない、ここは通信を誰かに繋ごう…確かに、オペレーターのヒバリだつけか…彼女なら腕輪の通信機能から直接…

【…】

「…もしもし！おい!!」

駄目だ。こつちもノイズを出すだけでろくに動きやしない。なんてこつた……つい  
てない。

苛立ちが込み上げて……

「…おい、巧……」

「あ？」

なんだよ、今取り込み中…

「なうんか、嫌な予感しない？」

海堂の呟きと同時に屋上の手すりを乗り越えてくる複数の人影。黄色いスカーフをなびかせた彼等は飛蝗のマスクを小脇に抱え、胸元には金色の鷺のエンブレムを光らせている。そして、バサツと羽音を立てて着地する巧と海堂と同じ『オルフェエノク』。翼を持つ一角獣というモチーフから『ペガサスオルフェエノク』とでも呼ぶべきか……。

彼女は巧たちに指先を向けるとマスクを持つエージェントたちに指示を出す。

『乾巧だな。ショッカーは裏切り者＜仮面ライダー＞を許さない。ここで抹殺する。』

これに反応して、ある者は飛蝗のマスクを被り『ショッカーライダー』へ……ある者は簡易型のベルトのバックルを倒し、ファイズを簡略化したような量産型ライダー『ライオートルーパー』へと変身。そのまま、巧たちを包囲する。

「クソ……噂をすれば、ショッカーかよ!? こちとら手ぶらだぞ……」

悪態をつく巧。すぐにウルフオルフエノクへと変身しようとしたが海堂が不敵に笑い止める。

「まあ、待てよ? こんな状況予想してないと思ったか?」

「?」

「俺だって、馬鹿じやねえんだよ!」

彼は鞄の中からゴソゴソとあるモノを取り出した。そう、ペイラーには引き渡したのはあくまでファイズギアとカイザギア……手札にベルトならもう1本あるのだ。

……『デルタギア』

ファイズとカイザのプロトタイプのツールであり、多くの人間を惑わせた魔のアイテム。詳しい説明はここで省くとして、海堂とて信用なるか解らないペイラーに戦う手段全てを預けるほどお人好しではなかつた。元の世界から持ち込んだベルトは3本だつたが、万一の事態に備えてデルタギアのみ別個で隠していたのである。

「コイツを使え…」

バチンッ!!

ナイスだ：つて言おうとしたが、それより一瞬はやくショツカーライダーの投げたクナイが海堂の手からデルタギアをはたき落としこれを回収したペガサスオルフェノク

がベルトを巻く。そして、デルタフォンに無慈悲な認識音声（パス）。

『変身。』

### 【C o m p l e t e】

人々の登場から間もなく、出番はまさかの敵に奪われての変身。白いフォトンブラットのラインが走り、黒の装甲とスース：赤い複眼のライダー『仮面ライダー・デルタ』が君臨。かつては敵側として散々苦しめられたギアだつたか、こんなに呆気なくまた敵となるはある種の因果なのか……

「そりやないっしょ!?」

「ちつ!!」

取り敢えず、海堂のドジは今は責めていられない。ウルフオルフェノク、スネークオルフェノクになつた彼等はなんとか応戦に入るもライダーシステムまで奪われた上に数まで勝る相手に渡りあえる道理など無い。次々とショツカーライダーとライオートルーパーの連係が襲いかかり、反撃しようと合間を狙えばブラスター・モードのデルタフォンで弾丸をデルタにぶちこまれ機会を潰される。

スネークオルフェノクはともかく、ウルフオルフェノクもそれなりにオルフェノクの

中では瞬発力や速力に優れるタイプだが、限られた屋上というフィールドかつ多勢に無勢では能力を発揮しろというのが無理な話。スネークオルフェノクに至つては成す術なくリンチされる始末だ。

『……そ！』

悪態をつくウルフオルフェノク。このままではじり貧だ：なんとか状況を開しなくては。

焦るその時、視界によぎる影。即座に理解したウルフオルフェノクはスネークオルフェノクを掴み、ショツカーライダーを踏み越え屋上からダイブ。そこを、飛来したオートバジンが掴み、彼方へと飛んでいった。

ショツカーライダーとライオートルーパーたちは地団駄を踏むがデルタはデルタフォンを口元に近づけ音声認証を行う。  
『3821（スリーエイトトゥーワン）。』



逃走、そして、巧と海堂は外部居住区へと投げ出された。オートバジンは主とおまけを運び終わるやバイク形態に戻り着地。やれやれ、散々な目にあつたものだ……呻きながらパンパンっと砂ぼこりを払い立ち上がる。取り敢えず、致命的な怪我は負わずに済んだのはせめての幸いだが……

「くそつ……俺ら以外にもオルフエノクがいるなんて聞いてねえぞ！」

「俺だつて知らなかつたつーの。ててて……つ…」

よりによつて、デルタギアを奪われ敵にそれを扱えるオルフエノクがいた。本当にうんざりする展開だ……ベルトも無しに戦うのは無理がある。さあ、どうする？ 極東支部に戻つてファイズギアとカイザギアを一刻でもはやく回収しにいきたいところだが、わざわざ敵から逃げたのに丸腰で戻るなど間抜けだ。だが、こちらにはオートバジンしかいない。

巧は辺りを見渡し、居住区を囲む隔壁へと目をつけるとオートバジンへと乗り込む。

「お、おい何処いくんだよ!? 支部は……」

「今、支部に戻るのはまずい。俺に考えがある。後ろに乗れ。」

慌てる海堂を後部に乗せ、先を急ごうとエンジンを鳴らす。

すると、海堂はふと、後ろを眺めて突然に巧の肩をバンバンバンバン！と叩く。

「巧、あれ見ろよオ!」

「…なんだよ！ …!?」

瞬間、振り向いた時には言葉を失っていた。外部居住区のあばら家を勢いよく踏み潰しながら向かつて来る鋼色の巨大なマシン……球体のような前輪に後部のあまりにも肥大なブースターが後部で幾つも束になつたバイク：いや最早、装甲車とでも形容すべき巨大な影が向かつてくるではないか？！

「…嘘だろ。」

『ジェットスライガー』：かつて、デルタが敵に渡つた時に幾度となく苦しめられたモンスター・マシン。縦横無尽の機動性に爆発的な速力：おまけに、ミサイルまで搭載しているというスマートブレイン社がどう考えても悪ノリで産み出したであろう産物。一応、ファイズやカイザにもあるが試運転では巧ですら扱えきれない代物だったが、使いこなす持ち主ならまさに悪魔的な戦力となる。

「…ちっ！」

一気に巧はハンドルをきつて、オートバジンを外壁目掛け繰り出した。直後、ジェットスライガーの横殴りのスライディングがいた場所に空振りし、低空ホバリングしながらデルタは巧たちを見据えながらデルタフォンをガンモードにして撃ちまくる！しかし、巧のハンドル捌きで避けられると再びゴオオ!!火を吹かしジェットスライガーを追う。

「巧、急げ！急げ!!」

「うるさい、少し黙つてろ！」

焦る海堂の声が耳障りだ。わかつて、でもここは人が住んでいるし道は複雑に迷路のようでスピードも出すに出せたもんじやない。下手をすれば衝動するか、人を轢くかのギリギリで運転をしているがすぐに限界はやつてくる。

「…！」

キキイイイ!!と急ブレーキ。とうとう行き止まりにぶち当たつてしまい、ジエットス

ライガーに完全に追いつかれてしまう。

『遊びは終わりだ。』

鬼ごっここの幕が下りる……。デルタフォンの引き金がゆっくりと引かれ……

バアアン!!

『!!』

：否、それよりもはやく貫かれたのはジエットスライガーのブースター。オラクル弾のレーザーが鋼鉄の管を融解させ、直撃には至らなかつたものの煙が上がり機体が不安定に揺れる。

「俺が考えも無しに逃げ回つてるとでも思つたか？」

仮面ライダーファイズ……乾巧にとつてこの手の危機など一度やそこらどころか指で数えきれるくらいではない。場数を踏めば、自然と頭は回転する……例えば、こんな時に『誰が頼れるのか？』『頼れる存在は何処にいるのか？』脳は冷静に答を出す。

★☆ ★☆ ★☆ ★☆

「……あら、駄目ね。やつぱり機械じや熱くならない。」

遙かに離れた場所……あばら家の屋根にスナイパーの神機を構える銀髪に眼帯の女性。胸元が大きく開いた服が特徴的な彼女は妖艶に溜息をつき、耳許の通信機で先行している仲間らに一声。

「後は任せたわよ。」

すると、瓦礫を蹴つて踊りでる刃とガトリングの銃口。咄嗟にハンドルをきつたデルタは強引に車体をよじらせ被弾を最小限に抑えると忌々しい乱入者を睨みつける。

「シユン、お前は引っ込んでろ。傷物にしたらギャラが下がる。」

「はあ!? ふざけんなよカレル!! コイツは俺の獲物だつづーの!!」

畜生め。コイツらは防壁の警護にあたつていたゴッドイーターだろう。あえて支部へとベルトをとりにいこうとした理由はこれか!…と気がついた時には他の方向からも近づく他のゴッドイーターらしき姿も見えた。まあ、あれだけジエットスライガーで暴れまわったのだから当然といえばその通りだろう。流石にこうなれば分が悪いとレバーを操作して浮遊を開始：神機からの弾丸が飛んでくるが致命的なダメージは与えられず鋼の車体は上へ…：

そして、バシュウウ!!!と轟音をたてて外部障壁へと突撃していく、格納していたミサイルを開発する。

「……ますい!!」

戦慄する巧。外界と支部内を隔絶する障壁を破壊して逃走する気だろう……そうなれば、空いた穴から外をウヨウヨするアラガミたちが雪崩れこんでくるのは間違いない。おまけに、守りの要たちはこの事態を片付けるために持ち場を離れているとなれば被害は甚大なものになる……しかし、バケモノマシンのスピードの前にもう為す術はない……

「逃がしません!!」

その時、ジエットスライガーの直線上に立ちはだかるのはアリサ。神機の銃口は恐れもブレもなくデルタを狙っているが、もし狙撃が成功したとしても操縦を失つた鉄塊が彼女にその莫大な質量で牙を剥くのは想像に難くない。

「よせエ!!!」

巧が叫ぶ。しかし、応えることない彼女。スコープのような蒼い瞳がデルタを見据える……絶対に外さない……自身があつた。あの車体も直前で避けられれば良い。それだけのことだ、不規則なアラガミに比べればあんなもの訓練の的。訓練と同じ、狙つて引き金を引けばいい……引き金をひけば……

『…………!?』

「……………え？」

しかし、寸前でジエツトスライガーは不意に車体をもたげ、アリサの頭上をゴオウ!!  
と過つていった。舞い上がる彼女の赤い帽子。彼方へと飛んでいく襲撃者。

結果、進路は上部へと逸れて装甲壁の頭をかるく削る程度におさまった。

「…………」

そのあとを、ただ……ただ……見送る彼女。

何故、自分は引き金を引けなかつたのだろう

何故、轢き潰すことだつて容易だつたはずなのに襲撃者は自分を避けたのだろう

……何故、自分は名前を呼ばれた気がしたのだろう

次々と浮かびあがる疑問。沈む太陽は日没を告げ、少女を日没と共に謎の闇へと誘おうとしているようだつた。

To be continued.

## 第五話 前編

『……』

極東支部よりはるかに離れた何処か。空はドームのような天井が闇を張り覆つている……

コンテナが乱立しているエリアにジエットスライガーはホバリングして半円を描きながら着地するとデルタは軽快に飛び降り、デルタフォンをベルトから引き抜いて変身解除。コンテナの列の影に佇む人影にズンズンと歩いていき仮面ライダーに変身していたとは思えない華奢な腕で掴みかかった。

「どういうことよ……アリサがここにいるなんて聞いてないんだけど!?」

『…』

「なんで私の仲間が…!! 家族が…ッ!! 極東にいるの!!」

相手は異形：彼女と同じオルフェノクと呼ばれる同属。蠶が靡く獅子の頭部に翼を持つ姿は神話のキメラと呼ばれた魔獸のそれ：『マンティコアオルフェノク』。普通の人間なら見るだけで足がすくんで動けなくなるような迫力だが、少女は怒りを剥き出しへ睨む。対して、マンティコアオルフェノクはつまらなさそうに鼻を鳴らしその手を振

り払う。

『それがどうした？今、誰が目の前にいようと変わりは無い。さつさとベルトを渡せ。』

「……」

『お前には果たさなくちゃならないことがあるはずだ。その家族とやらのためにな。』

「……」

そして、彼女はベルトを外し乱暴に突き出した。マンティコアオルフェノクがそれを受け取るのを確認すると、少女は背を向け去ろうとするがマンティコアオルフェノクは彼女を呼び止めた。

『待て。おかしな気を起こすなよ？俺達はオルフェノク……死人なんだ。決して、誰かに受け入れてもらえると思うな。』

「わかってる。こつちはあんたよりオルフェノクのキャラリアは長いんだから。今更そんなこと……！」

『なら、構わない。取り敢えず、ベルトが手に入つた……首領もお喜びになるだろう。これで、【帝王のベルト】は完成する。その時は俺とお前が選ばれる……覚悟はしておけ。』

気にさわることを偉そうに言い終えたあと、デルタギアを携えてマンティコアオルフェノクは翼を拡げ去っていく。少女は見届けたあと、懐からペンダントを取り出すと蓋を開き中の写真を眺める。その写真には戸惑うような顔をしたアリサが写つてお

り、彼女は胸に込み上げる思いを吐きださないようにこらえながら目を瞑つた。

「…………アリサ…」

……ああ、せめて自分が『異形』じゃなければ…

Φ Φ Φ Φ Φ

「…どけ！」

最早、巧の怒りは頂点に達していた。極東支部の廊下をマンモスの行進のように進み、その後ろを海棠が平謝りをしながら続く。目指すはラボラトリ……よくもまあ、こんなことしてくれたと一言言つたあとに一発ぶん殴つてやらなくては気が済まない。

すれ違う職員やゴッディーターたちを押し退け、ラボ前の扉。プシュツと開くやそのまま中央に座す狐目の主の胸ぐらを掴む。

「テメエ、随分と舐めた真似してくれたな博士？」

「…い、乾くん?!」

ペイラー榊、彼はいきなりの展開に慌てている様子だつたが構わず揺さぶる。「信じろと言つた手前に、真つ先に裏切るなんて随分と良い根性してやがる。」

「お、落ち着きたまえ！上でのことはさつき報告を受けたばかりだ…!!私は何も関与していない！」

「いやあ、俺達からベルトとつたあとにこれじやあ流石に信用出来ないよねえ？」

海堂の言い分は最も。戦う手段であるファイズギアとカイザギアを託した直後の襲撃とあつては疑うなというのが無理な話。明らかにタイミングを狙つたとしか思えない。

「本當だ、信じてくれ!!私はなにひとつ知らなかつた…!!誓つて、君達を陥れたりなどは……」

「じゃあ、さつさとベルトを返せ！」

「……わかつた。ここより下にある総合研究ラボで私の助手のリツカくんが持つていてるはずだ。分析は彼女に任せたからね。」

博士も今回ばかりは致命的すぎると観念したのか、ベルトの有りかを話すや、巧は彼を突き放して海堂と共にラボを後にする。ゲホッと咳をしながら見送ると眼鏡の位置を直して椅子へ改めて座りなおす。

(やれやれ……先手を打つてきたか。だが、私もそう易々と引き下がりはしないよ?)

☆☆ ☆☆ ☆☆ ☆☆

「なあ、巧い少し落ち着けつて。眉間がすんごいことなつてるぞ? こんなかんじに皺寄つて……つて元からか。」

「うるせえ!!」

海堂を突き放し、本来なら技術者しか立ち入らないラボの深層へと入る巧。油やら鉄臭かつたりと普通の人間なら近寄るのも御免被りたいところだが、あちこちにいるエンジニアたちを押し退けて目指すは最奥の部屋:ベルトが保管されているであろう場所。そここのゲートを手にかけるとシュンツと開き…

〔5…5…5……Standing by〕

「これで良いのかな…？よし、変身!!」

「!?」「!？」

その先のガラクタだらけの部屋ではゴーグルをつけた少女がファイズギアで今まさに変身シークエンスをとろうとしているではないか！ ファイズギアはオルフェノクにしか扱えず、萬一人間が使用した場合はリミッターが発動して下手をすれば死の危険性があるのだ。途端、巧の頭から怒りなどふつとび、少女の凶行を止めにかかる。

「おいバカ、よせ!!」

「えっ、ちょっと…!？」

なんとかファイズフォンを奪おうとするが、少女も抵抗し部屋のガラクタが散乱していき一部が海棠の足に当たってしまう。『いつてえ!!』とのたうちまわる海棠も加えてかなり混沌とした空気になるが、その拍子にファイズフォンがギアに装填され：

【ERROR】

「「あ…」

Φ Φ Φ Φ Φ

「あー、  
そんなことになつてたの？」

全然、  
気がつかなかつた。」

楠木リツカ……それがファイズギアを無謀にも使つた彼女の名前。ショートした勢いで巧もろとも壁に叩きつけられたりしたが、割りとピンピンしている：頑丈だな。この部屋は彼女の間借りしている研究室らしくあちこちに書類やら何かの機械類らしきガラクタなどが散乱しており、あとは赤やら青やらのチューブで繋がれた建造中の神機とおぼしき物体やら……

かなり若いがエンジニアらしいが……いくらなんでもこちらの世界でのオーパーツであるベルトを使うのは命知らずにも程がある。

「名残惜しいけど、返すね。いやあ、やつぱり駄目だつたか。イツシンくんにも手伝つてもらつたけど同じだつたし……」

「ダメ元でやつてたのかよ。」

更に部屋の隅ではエラーによるショートを喰らつたらしいイツシンの姿が：『スタングレネード20個で買収されたツス……』とぼやいている。こつちはゴッドイーターなので肉体はリツカより大丈夫だろう。

取り敢えず、ファイズギアとカイザギアを返却してもらう巧たち。

「良かつたら、変身してからのデータをとりたいんだけど……」

「きこえなかつたか？俺はお前たちを信用していない。神機もベルトが手にはいつたならもう要らねえ：世話になつたな。」

「！ まつて!!」

早々と立ち去ろうとした巧だつたが、リツカに呼び止められる。

「いくらそのベルトでも、オラクル由来じやないからアラガミにはすぐに対抗できなくなるよ！ それに、フェンリル出たところで行く宛は…」

「構うな。」

リツカを振り切り、ラボを後にする巧……と、そこへふらふらとアリサが現れる。ちようどいい、短かつたが挨拶でも済ましておくか。

「よう。」

「……？ ……あひ？」

「あ？ どうした、寝惚けてんのか？」

「?? …う？」

なんだ…様子が妙だ。視点もあつてないし、へらへらとしていつもの凜とした顔立ち

は何処へやら口元がだらけきつてゐる。話も通じてる様子が無いし、……それとキツイ薬のような臭いもする……。

「おい！」

明らかにおかしい……。巧は咄嗟にゆらゆらする彼女の腕を掴む、その時だつた。

——キュイイイイイイイイ

「?」

巧の視界は目の前でスタングレネードが炸裂したように強い光に包まれた。

To be continued.

## 第五話 後

——もーいーかい？

——もーいーかい？

——まーだ、だよ！

——もーいーかい？

——もーいーかい？

——まーだ、だよ！

——もーいーかい？

——もーいーよ！

……かくれんぼ。棄てられたクローゼットに小さな体はすっぽり入る。ここならパパとママに簡単には見つからない。だから……

……これがいけなかつたんだ。

グシャ!!

突然、低い唸り声と肉が潰れてくちやくちやと租借される音…。そして、私はクローゼットの隙間から見てしまつた。真つ黒な巨大な影がパパとママを食べちやうのを…

むしやむしやと、ただ口の中にほうばつていく…千切れた腕も、破けた白衣も、人間  
という容を崩して呑み込んでいく。

「やめて… やめて、食べないで……」

くちやくちやくちやくちやくちやくちや。

最後にごつくん。もう血の跡しか残らない…。そして、こちらを向く…その顔は…

「いやああああああああ  
やめてええええええ  
!!!!」

「!?」

唐突な悲鳴に何事かと、動搖に包まれるラウンジ。慌て手を離した巧だつたが、完全に絵面は年頃の少女に手をあげようとしたオッサンである…アウト。否定しようとす

るが、ぞろぞろと集まるギャラリーたち……これはまずい。

「おい、違う！」「いつは……」

「ああ、皆さん……お騒がせしました！ 何でもありませんから!!ええ……！」

そんな時、何処からともなく現れてギャラリーたちを追いはらつしていく白衣に黄色いバンダナの中年男。そのまま、そそくさとアリサを回収すると『いやあ、すみません。ご迷惑を。』……そう言い残して去つていった。

……何だつたんだ。

Φ Φ Φ Φ Φ

P. T. S. D. ?

「恐らくな…」

暫しほとぼりが冷めるまで、リンドウの部屋に避難した巧。直属の上司である彼に話をきくと、どうやらアリサは精神的に不安定な要素があるらしく、かかりつけの医師と共にロシアからやつてきたのだとか。極東支部に移った今でも、定期的な投薬に出撃後もカウンセリングが欠かせないという話。新型という鳴り物入りで来たわりには随分な壊れ物である。

「ま、別に珍しくないさ。特にこのご時世でこんな職場ならな……」

リンドウのフォローも確かにその通り。アラガミが跋扈するこの世界で肉親や知人を目の前で食いちぎられるなんて話はよくあるのだ。そして、人智を超えた神になぞられる化け物を生身で相手をするなんて、全うな精神でいられるほうが本来なら珍しい。ぶつちやけ、この激戦区最前線こと極東支部の隊員たちは個性こそ強けれど、気さくな人間や親切な人間が多く摩りきれているような者は表向きは少ないよう見える。

されど、この世界を生きる全ての人間が強くしなやかではないのだ。

「アリサの経歴をちょいとこつちも洗つてはみた。幼い時に両親を：ロシアでの親友だつた同期をアラガミに喰われたらしい。しかも、本人の目の前でだ。」

「…」

大切な人間を目の前で奪われる… 作為的であれ事故であれ、その傷の痛みと深さはよく知る巧。しかも、アラガミに喰い殺される…しかも、肉親や親友となればまだ幼さと若さの半々である彼女の精神を歪めてしまるのは納得できる。異様なプライドを誇示したり、他人の死を嘲笑したり、……全ては自分の不安への裏返し。これなら、納得はできる。許しはしないが…

「そういえば、アリサの過去なんてまたどうして…。それに、お前さ…さつきは出ていくとか騒いでなかつたか？」

「色々あつた。もう少しここにいる。」

？ … ？ うか。先の騒ぎはリンドウの耳にも入つていたので、気になつてはいたが彼が残留するに越したことはない。

で、と次に巧は海堂に視線を向けた。

「あー、うん知つてたよ。」

やつぱりか。アリサと同じくロシアから来たならと思つたが予想通りだ。

「アリサちゃんの保護者とも知り合いだし、ぶつちやけ任されてこの極東にくつついてきたんだ。」

巧と違い、ロシアに放り出された海棠はカイザギアと今は奪われたデルタギアを引っ提げて宛もなくさ迷つていたところを現地の女性医師に拾われた。その女性医師がアリサの親代わりであり、本業で手がまわらない自分に代わつて彼女の様子を伝えてほしいという依頼を受け、わざわざ極東までついてきたのである。

「…でな、ロシアで亡くなつたアリサの同期つてのがその保護者の女ドクターの妹だつたんだ。それを切つ掛けに溝が出来ちまつてな。今、あの娘に寄り添つてやれてるのは担当医のオオグルマ先生くらいか。」

：あの黄色いバンダナの中年男、あいつがオオグルマか。巧は先のアリサのフォローに入つたあの時に見た限りだが、はつきり言つて胡散臭い部類というのが印象。しかも、年頃の少女についてまわるオツサンとか絵面がアウトである。……まあ、巧自身も歳なので下手をすれば他人事ではないが

「しかし、どうしてまだフェンリルに残る気に…？」

「……嫌な予感がした。今、ここを離れるべきじゃない…。きっと、何かが起こる気がする…よくないことがな。」

「…は？」

あれだけ、上司に突進してからの掌返し。理由が要は勘とか：海棠は呆氣をとられていたが、巧は確信を持っていた。そして、巧の『勘』が実は全く別のものであることが明かされるのはまだ先である。



……自分としたことが

あれから薬の副作用が切れたアリサは、ラウンジで起こした自らの騒ぎに頭をかかえながら神機保管庫にいた。アタツシユケースのような台座に陳列する神機たちの中から、彼女は自分の深紅の神機『アヴェンジャー』をとると、エレベーターで演習場を選択する。

(頭がまだモヤモヤする：気晴らしをしよう。)

よりによつて、忌々しいあの男：乾巧に自分の情けない姿を見られてしまつたのが腹立たしい。先日、殴られた借りも返していいのに！　まあ、仕返しなんて子供っぽいことはさておき、こんな時は演習に限る。出撃して、アラガミをぶちのめせればそちらが良いが、第二部隊の防衛班なんぞと一緒に任務などされたらあそこの隊長からの小言が鬱陶しくてたまらない。第三部隊は：まあ、別の意味合いで避けたい。  
というわけで、エレベーターを降りてやつてきた演習場……だつたわけだが

「お、新人！ 訓練か？」

「げ……」

降りてすぐの待合室のベンチに腰かけていた男に顔をしかめる。黒髪のツンツン頭に紅いジャケットは、アリサが嫌がる防衛班の第二部隊隊長『大森 タツミ』だったのだから。気さくで明るい人物だが、自分とはソリがあわない……そんな表情を露骨に顔に出すものださらタツミも苦笑する。

「おいおい、そんな顔するなよ？ 一応、階級と経験はお前さんより上だぞ？」  
「……失礼しました。」

謝り方すら不服丸出し、人によつては鉄拳制裁が待つていてもおかしくないが幸い、タツミはそんな人間ではない。それにしても、彼は何をしていたのか……

「やれやれ。演習なら先客がいるぞ。もう少し経つてから出直したほうが良い。」

：先客？ 怪訝な顔をしながら、厚いガラスの向こうの地下演習場を見れば確かに見覚えがある人影が。ソーマにコウタ……そして、自分と同じ新型ゴッドイーターであるイツシン。3人でヴァジュラのホログラムに連携しながら立ち向かっている。ああ、成る程。

「…そこそこ悪くない動きですね。」

「随分、上から目線だな。」

当たり前だ。演習のスコアや出撃した際のスコアだつて、自分が圧倒的に上だ。同じ新型？だから？ 正直、戦績のデータをロシアに行く前に見せられた時は呆れを通りこして情けないとまで感じたほど…もつと精進してほしいと思つたくらいだ。  
乾巧？論外です。

「お前さんは参加しなくて良いのか？」

「私は別に。取り敢えず、邪魔にならなきやそれで構わないので。」

アラガミを倒せればそれで良い。自分の両親を奪い喰らつた奴等を殺し尽くせれば

仲間などどうでも良いのだ…むしろ、役立たずなど居ないほうが良い。…目の前で死なれるくらいなら。

「…（そう、仲間なんて…。私は独りでいい。独りで良いんだ。）」

無意識に拳を握る…頭の中で呪文のようにアラガミを殺すことだけを考える。私は『復讐者（アヴェンジャー）』…握る深紅の神機もその名を冠す。だから、馴れ合いなんて不要だ…滾る怒りのまま冷たい心で荒ぶる神々を殺す。それだけで…。

自ずと眉間にシワが寄る…その深溝にあるものを追及するのは野暮だらうと弁えているタツミ。まあ、性分としてお節介な先輩風は吹かせてしまうのだが…と小さくため息をつく。

「そうだな…お前さんがお前さんなりに戦う理由はあるんだろうな。だけど、それは他の奴も同じ…『日銭を稼ぐため』『自分の強さを求めるため』『なりゆき』はたまた、『命のやり取りを楽しむため』なんて色んな奴がこの極東にはいる。…だから、お前さんが戦う理由がなんであれ否定はしない。ただ『俺達（ゴッドイーター）』の本分を見失うな

よ？少なくともアイツらはそれに向き合っている。」

最後に、『…ま、こう言うのガラじやないがな！』と言い残して去つていった。

残つたアリサはむつとした気持ちを抱きながら再び演習場を見下ろす：

「ゴッドイーターの本分？理由？…そんなの、アラガミを殺すこと以外にあるわけないじやないです。」

そう、自分は両親を奪つた神々を喰らい尽くす…そのために『復讐者（ゴッドイーター）』になつたのだから。